

第 64 回

地域農林経済学会大会 個別報告・要旨集

会場 京都府立大学

会期 2014年10月17日(金)～10月19日(日)

【個別報告プログラム】

10月18日(土) [9:30～12:00] [14:45～16:45]

10月19日(日) [9:00～12:30]

第1会場

1-1	Food Safety Standard as Determining Factor of Competitiveness Of Indonesian Coffee Export Agus Nugroho 他 (Kyoto University)	1-10	Gender Analysis of Access to Credit among Farming Households in Nupe and Yoruba Cultures of Nigeria Ajadi Adebola A. 他 (Graduate School of Kinki University)
1-2	The Structure of Rice Market Integration in Guizhou, China Chen Shuning 他 (Kyoto University)	1-11	ガーナ北部における小規模ため池を利用した稲作の社会経済条件 小出淳司 他(国際農林水産業研究センター)
1-3	品目別食料自給率の要因分解分析 廣瀬拓 他(北海道大学大学院)	1-12	紛争後のスリランカにおけるタミル人世帯の生計再建戦略 - 北部州マナー県の事例より - 原田智子(名古屋大学大学院)
1-4	農山村社会における小規模水道システムの 持続要因に関する研究 - 全国の簡易水道管理組織を対象に - 松本京子 他(京都大学大学院)	1-13	ベトナム産ロブスタ種コーヒーのフードシステムの実態 - 生産から輸出までの連鎖構造を中心に - 林和哉(京都大学大学院農学研究科)
1-5	BDF を利用した「エコ畜産物」の消費者評価 - 岡山県笠岡市を対象に - 富田大輔 他(岡山大学大学院)	1-14	Host Residents' Attitude toward Community-Based Ecotourism: Empirical Evident from Three Sites in Cambodia Seyhah Ven (Graduate School of Nagoya University)
1-6	地域コミュニティ活性化における学生の役割 河村律子(立命館大学)	1-15	The Competitiveness and Cost Efficiency of Rice Farming In Indonesia Ernoiz Antriyandarti (Graduate School of Kyoto University)
1-7	非農学部学生による農山村・農林業体験前後の意識変化 田中淳志 他(農林水産政策研究所)	1-16	トルコ農村部における社会慣習に関する意識形成 - アダナ県低平地地域を事例として - 丸健 他(一橋大学)
1-8	学習指導のための農業学習に対する価値意識の把握 - 中学校における農業体験学習について - 岳野公人 他(滋賀大学)		
1-9	中山間地域行政における地域担当職員制度の導入と課題 山内俊秀 他(神戸大学大学院)		

Food Safety Standard as Determining Factor of Competitiveness Of Indonesian Coffee Export

Kyoto University. Agus Nugroho
Kyoto University. Masaru Kagatsume

On the one hand, food safety standard is considered as a way to reduce health risk from food trades. On the other hand, the dissimilarity in the standard, which has been applied among bilateral trades, can be also considered as trade barriers. This is mostly a true case for developing countries since their exports heavily depend on particular commodity. Indonesia, where coffee is one of the most important export commodities, is also affected by this trade barrier. Risk on health is presumably uncertain, but we empirically found that the negative impact of stricter food safety regulation on coffee trades is present. Using panel data analysis on Indonesian coffee exports to thirty-four importing countries, this study provides further arguments on the topic of food safety and trade. By applying gravity model, our findings suggest that more stringent food safety regulations, such as *Ochratoxin A* (OTA), would have negative impacts on Indonesian coffee export quantities. Additionally, the long-run elasticity of OTA is larger (-0.51) than its short-run elasticity (-0.34). Our results also suggest that the presence of Indonesia's comparative advantage shows positive and significant effect on its coffee exports. This finding suggests that on average Indonesia's has adequately achieved optimal resource allocation and cost efficiency in coffee industry. Finally, when we observe the relationship between Indonesia's coffee export and regional connectivity, we found that Europe and America are important trading partners of Indonesian coffee export. Although GMM estimator is able to predict well, further research using more countries and longer time span is encouraged to contribute more robust result.

The Structure of Rice Market Integration in Guizhou, China

Kyoto University, Chen Shuning
Kyoto University, Masaru Kagatsume

Market integration is defined as a smooth transmission of price information among separated markets. Successful government intervention such as market liberalization or price stabilization needs knowledge of market integration. Traditional studies on the market integration employed time series analysis to test price movements. Existence of cointegration in price series is considered as evidence of integration between spatially separated markets. However, these gave ambiguous results on market integration and could lead wrong implications. It is important to understand that trade pattern affects the market integration.

In this analysis, we use two types of rice (*Indica* and *Japonica*) prices data in selected three markets in Guizhou province, China to analyze the market integration. Rice is the staple food in China. Guizhou is the least developed region in China. When severe drought hit this region, which caused a sharp decline in rice production, the self-sufficiency rate had dropped to 70%. It makes sense to distinguish *Indica* and *Japonica* type to discuss about market integration as they have different trade pattern although their transfer costs are similar. *Indica* type rice is historically traditional grain in Guizhou and 90% of rice produced locally belongs to this type. *Japonica* type rice is imported from other region. The selected three markets are Guiyang, Zunyi and Liupanshui, respectively the central market, generally surplus market, and long-term deficit market. Zunyi is 146 km away from Guiyang in the north, Liupanshui is 252 km away from Guiyang in the west.

We employed cointegration approach to investigate the presence of integration among price series, and indicated the direction of causality in price formation between markets. The statistical test results showed the following. In the case of *Indica* type, two market pairs (Guiyang-Zunyi <nearest> and Liupanshui-Zunyi <farthest>) are found to be integrated, the remaining market pair (Guiyang-Liupanshui) is not integrated. On the other hand, *Japonica* type shows market integration for the pair (Guiyang- Liupanshui) unlike *Indica* type. In addition, the other pair (Guiyang-Zunyi) has the integrated relation like *Indica* type. For the remaining pair with longest distance (Zunyi- Liupanshui), the integrated relation has not been observed unlike *Indica* type.

In the case of *Indica* type, for the market pair even with the longest distance from each other the integration is observed but it is not the case for the *Japonica* type. In addition, for the market pair with the shortest distance, the integrated relation has been observed in both rice type. Judging from these observation, it could be summarized that the distance factor dominates the other factors such as rice type difference for existence of the integrated relations. In addition, the combination of surplus and deficit markets or the difference in the imported vs domestically supplied market has also impacted on the integrated relation between the market.

品目別食料自給率の要因分解分析

北海道大学大学院 廣瀬 拓

北海道大学大学院 赤堀 弘和

旭川大学 近藤 功庸

北海道大学 山本 康貴

日本の食料自給率は長期的に低下傾向にあり、食料自給率向上は日本における農業政策の重要な政策目標になっている。品目別食料自給率を国内生産量と国内需要量の比率と定義すれば、品目別の食料自給率は、生産要因である国内生産量だけではなく、需要要因である国内需要量にも左右される。国内生産量は、単収（作付面積あたり国内生産量）に作付面積を掛けたものと定義上、常に等しいので、国内生産量は単収と作付面積の動向に左右される。また、国内需要量は、一人当たり需要量に人口を掛けたものと定義上、常に等しいので、国内需要量は一人当たり需要量と人口に左右される。例えば、需要要因の一つである一人当たり需要量の増加は、国内需要量を増加させるので、食料自給率低下の方向へ影響を及ぼすことになる。

もし日本の食料自給率が、作付面積や単収などの農業の生産要因よりも、一人当たり需要量や人口などの需要要因により大きく影響を受ける指標ならば、食料自給率は農業政策が目標とすべき政策指標として、適切なのだろうか？日本政府も、食料自給率の水準は、国内農業の食料供給力の程度を示すものでなく、安全保障を維持するためには、農業生産による潜在的な供給能力を示す「食料自給力」の維持向上を図ることの重要性を指摘している（農林水産省, 2013）。

食料自給率の要因分析に関する先行研究として、小林（2000）と社団法人食品需給研究センター（2011）がある。小林（2000）は、食料自給率を需要要因と生産要因に要因分解し、分析を行った先駆的な研究である。しかし、小林（2000）は、需要要因である国内需要量を人口要因と一人当たり需要量要因に分解した分析を実施していない。社団法人食品需給研究センター（2011）は需要要因を人口要因などに分解した分析を実施しているが、生産要因を単収と作付面積に要因分解した分析を実施していない。

本論文の課題は、「日本の食料自給率は、生産要因よりも需要要因に、より大きく影響を受けやすい政策指標である」という仮説検証を試みることである。この仮説を検証するため、品目別食料自給率の過去推移を需要要因と生産要因に分解し、さらに需要要因を日本の総人口と一人当たり需要量の要因に、生産要因を作付面積と単収の要因に峻別した要因分解分析を試みた。

農山村社会における小規模水道システムの 持続要因に関する研究 —全国の簡易水道管理組織を対象に—

京都大学大学院・松本京子
京都大学・星野 敏
京都大学・橋本 禪

1. 背景と目的

日本の農村では、飲料水の供給は当然の条件であり、100%に近い普及率を達成している。しかし、行政サービス水準の低い発展途上国の農村地域においては、依然として極めて重要な生活関連施設である。このような地域では、巨額の公共投資を必要とする大規模な水道システムではなく、むしろ小規模な簡易水道施設による供給が適当である。そのような施設の維持管理については、行政に依存するのではなく、地域住民自身による参加型の管理運営が求められている。

2012年の個別報告では、愛知県の7つの小規模水道施設の管理組織を事例としてとりあげた。本個別報告では、愛知県の事例調査で明らかとなった小規模水道組合の持続要因を参考に、日本全国の簡易水道の管理組織を対象とした。公的機関の管理の及ばない農山村地域において、地域住民による小規模水道システムが成立している地域社会の実態と管理運営を持続させる要因を明らかにすることを目的とする。

2. 分析の枠組みと調査方法

本論の第1の課題は、水道システムの持続可能性の評価である。第2の課題は、水道システムが持続可能である要因と、持続可能ではない地域の課題を明らかにすることである。そのため、第1の課題で明らかになった持続可能性の高低により、何が共通しているかを明らかにする。

本調査では、給水対象が100人以上5,000人以下である簡易水道を小規模水道とする。日本全国の簡易水道組合のある32都道府県の内、調査に協力いただいた27都道府県内の372組合にアンケートを配布し、232部が返ってきた。配布先は簡易水道の管理組織であり、アンケートの回答者は組織の代表者である。

3. 小規模水道システムの持続要因

水道料金を支払っている人の割合は、91-100%が86.3%を占めた。規約がある組合は全体の81.2%であり、その内、規約に水道料金の不払い者に対する制裁を記載している組合は22.8%であった。制裁を施行したことがある組合と施行したことがない組合は、5.1%と4.7%であった。32.1%の組合では、不払い者がいたことがないと回答した。規約に制裁が設定されていなくとも、水道料金の徴収率が高いことがわかった。

全体の73.5%が明確な水道の供給範囲を持ち、その内の29.9%が自治会内の一部、もしくは単数の自治会に供給していた。組合で設定している範囲内のすべての人を対象に水道を供給しているのは71.8%であった。範囲内のすべての対象者へ供給していない組合における非受益者の割合は、30.8%が0-50%であり、組合から供給を受けていない理由は、自宅の井戸や近くの公営水道を使用していることが多かった。

BDF を利用した「エコ畜産物」の消費者評価

－岡山県笠岡市を対象に－

岡山大学大学院・富田 大輔
岡山大学・佐藤 豊信
岡山大学・駄田井 久

【課題と目的】 農業分野においても環境にやさしい農業生産の振興が求められている。その一策としてカーボンニュートラルの性質をもつバイオディーゼル（BDF）の活用が考えられる。現在、BDF の利用先は公共交通機関等の行政サービスに限定され農業分野での利用は少ない。BDF を利用して生産された農畜産物は、農業機械用燃料として BDF を使用する以外は通常の栽培方法で生産される。そのため、BDF 利用農畜産物と通常栽培の農畜産物の差別化が農業生産における BDF 利用の普及に向けた課題となる。そこで本研究では、BDF の農業生産利用を行う予定である岡山県笠岡市を対象とし、BDF を利用した環境にやさしい畜産物（以下、「エコ畜産物」）に対する消費者の選好を明らかにする。

【対象地域の現状】 対象地域では、BDF の生産を社会福祉法人笠岡市社会福祉事業会笠岡学園（以下、笠岡学園）が担っている。笠岡学園では、市内の住民や事業者から廃食用油の回収を行い、年間約 10,000ℓ（2012 年度）の BDF を生産している。現在の BDF の利用先は、市の公用車や学園所有のトラクターであるが、将来的には、笠岡湾干拓地の畜産業に利用拡大する予定である。笠岡湾干拓地では、15 戸の畜産農家がトラクターやハーベスター等の農業機械を利用している。これらの燃料はほぼ軽油であり、発生する二酸化炭素量は年間 840 トンである。これを笠岡市内で生産される BDF に代替することにより年間およそ 68 トンの二酸化炭素削減が可能であると推計される。

【研究方法】 一般の消費者を対象に牛乳および牛肉の 2 品目に関して選択型実験を適用したアンケート調査を実施する。選択型実験に用いた属性は、表 1 に示した「産地」、「生産方法」、「価格」の 3 種類である。生産方法が、BDF 利用である場合がエコ畜産物であり、軽油利用の場合と比較すると二酸化炭素排出量が約 10%少なくなる。また、回答者には、はじめに BDF に関する情報（カーボンニュートラルの性質、対象地域での取り組み）を提供し、3 種類の属性以外の条件は通常栽培の畜産物と同等であるという仮定のもとで、これらの評価をしてもらう。その結果に基づいて牛乳および牛肉に対する選択確率曲線の導出を行い、エコ畜産物に対する消費者の選好を明らかにする。

表 1. 選択型実験で用いた変数

変数	水準（属性変数）	
	牛肉	牛乳
産地	笠岡市、その他の地域（国産）	
生産方法	BDF を利用、軽油を利用	
販売価格	250 円、300 円、350 円 400 円、450 円 (100 g あたり)	180 円、190 円、200 円 210 円、220 円 (1000ml あたり)

地域コミュニティ活性化における学生の役割

立命館大学・河村律子

農村地域の過疎化・高齢化にともなう地域の活力低下に対して、様々な地域活性化の施策が各地域で行われている。本報告は、そうした施策のひとつの実践を対象として、地域に学生が関わることの効果を住民・学生双方のアンケート調査および聞き取り調査をもとに考察するものである。

京都府においては、2008年度より「ふるさと共援活動」の取り組みが府内12カ所で行われている。これは、府の支援のもと、地域が大学やNPOなどと協力して共援組織を設立し、地域活性化に取り組むものである。具体的には、集落調査、交流体験企画、農作業や集落整備作業など、それぞれの地域と共演者の体制に添った活動が行われてきた。府の支援は3ヶ年であるが、その後も第2次活動や他の事業としてひきつづき活動を行っている地域がある。

本報告では、南丹市日吉町五ヶ荘地区で行っているふるさと共援活動を取り上げる。対象地域は7集落、約230戸、約470人からなる地域である。該当地域を校区とする小学校が2007年に閉校（当時児童は22名）となり地域の核を失うなかで、2009年度より報告者のゼミと共援活動に取り組み始めた。京都府の3ヶ年の支援のあと、南丹市や大学からの支援のもと活動を続けて、現在6年目となる。現在は、地域で行われている日曜日の朝市でのカフェ提供（月に2回）、祭りなど地域の行事の準備段階からの参加、また農業体験やイベントを通じた地域との交流を行っている。初年度はどちらかという集落側の要請を受ける形で調査や祭りへの参加などを行っていたが、次第に学生が企画を提案するようになり、学生ならではの情報発信も行っている。

活動開始時に行った住民アンケート調査では、学生への期待は決して大きいとはいえなかったが、5年間の継続によって、それはかなり変化してきている。とはいえ、地域の7集落は東西約7kmにわたっており、学生たちの活動が全体に知られているともいえない。カフェや各種行事で話を交わす人々は学生の活動を高く評価されるが、それは地域の一部の方でしかない。それで、全戸へのアンケート調査によって住民が学生をどのように受け入れており、それが地域の活性化にどのように貢献しているのかを明らかにする。

一方、活動に関わる学生は5年間で総勢50名を越えた。彼らに関わるのはゼミに所属する2年間であるが、卒業後も地域と何らかの関係をもつ学生もいる。彼らは活動で何を得たのかも明らかにする。

これらを明らかにすることは、地域に関わる活動を、行政の施策として始めた活動であっても、また、支援がなくなった後も、息長く継続していくための条件を提示することにつながるであろう。

非農学部学生による農山村・農林業体験前後の意識変化

農林水産政策研究所・田中 淳志
農林水産政策研究所・田端 朗子

1. 背景と目的

非農学部生を主とした学生への調査では、小・中学生時代の農作業体験や生きものの体験が、成長とともに自然を大切に、環境配慮行動をもたらす効果があることがわかっている¹⁾。農山漁村地域での学校の体験学習を通じ、食の大切さを学んだり、自然や文化に親しむ取組みが行われ、一定の教育効果が得られることがわかっているが、学生における同様の体験が、学生の価値観や人生観の変化にどのような影響を及ぼすのかについては不明な点が多い。そこで非農学部の学生達が、農山村に長期滞在し農林業を体験することが、自らの社会的責任や農林業・農山村への意識にどのような影響を及ぼすのかを調査した。

2. 方法

A大学主催の2つの自主参加プログラム、B大学研究室のゼミ活動及び自主参加プログラムの計4プログラム参加学生に2013年にアンケート調査を行った。A大学林業体験プログラムは岩手県で5泊6日の日程で、同じく農業体験プログラムは山形県で5泊6日の日程で行われ、各14名、15名に対し参加前、参加直後、参加1ヶ月後の3度調査を行った。B大学新潟県農業体験プログラムはゼミ活動の一環で3泊4日の日程で、長野県農業体験プログラムは3泊4日の日程で行われ、各12名、6名に対し参加前、参加後の2度調査を行った。「仕事・将来」「食及び生活」「コミュニティ・農山村」「農業・林業」などについて意識変化を問う約60の質問を設定した。

3. 結果 (図1, 図2)

参加後に、仕事を通して自分が社会に貢献したいとより強く思うようになることや (図1)、農林業が地域コミュニティの助け合いや取決めによる結びつきで成立していること (図2) などの認識が強まったが、1ヵ月後には同認識が薄れた学生も見られた。体験プログラム後に一定程度期間が経過してからの効果の減少要因の解明が今後の課題として挙げられ、また、強制的参加より任意参加の学生の方が認識を大きく見積もる傾向は、既存研究²⁾と同様であった。

参考文献

- 1) 呉宣教, 無藤隆 (1998), 自然観と自然体験が環境価値観に及ぼす影響, 環境教育 17(2):2-13
- 2) 多炭ら (2009), 農村振興活動を通じた大学専門教育の場としての農山村の価値—地域環境点検活動への参加を事例に一, 農村生活研究第 53(1):2-11

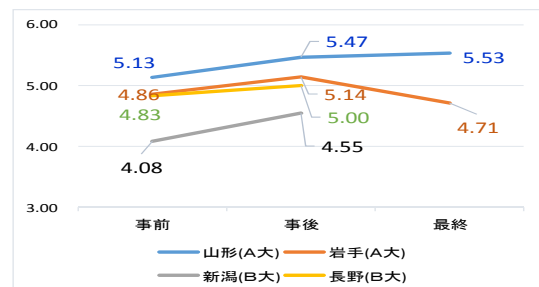


図1 仕事通じて他人の生活を豊かにしたい

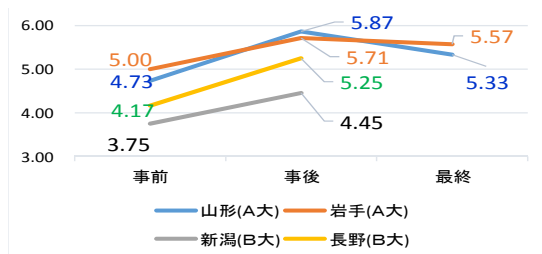


図2 日本の農林業は農山村コミュニティと強く結び付いている

学習指導のための農業学習に対する価値意識の把握 -中学校における農業体験学習について-

滋賀大学 岳野公人
京都大学 星野 敏
京都大学 橋本 禪

1. はじめに

昨今の食糧事情、農業の担い手、農村地域の衰退など、我が国において食糧を生産するという仕事に関して、多くの課題が存在する。また、農村の役割や農産業の形態が変化していく現代において、農業学習のあり方や教育内容について議論することは非常に重要だと考えられる。本研究では、現在実施されている農業学習における学習状況の実態を着目した。

義務教育における専門的な農業技術教育に関して、体験を伴う学習内容を実施している教科は、中学校の技術・家庭科技術分野のみである。また、この教科では農業に関わる学習を“生物育成”という内容で取り組み、基礎的・基本的な知識および技術の習得、社会や環境に果たす役割と影響についての理解、またこれらを適切に評価し活用する能力などの諸能力の獲得を学習目標としている。さらに、生物の育成や成長・収穫の喜びを体験することやこれらに関した職業についての理解を深めることも期待されている。この学習内容は、2008年より必修の学習内容となり、すべての中学生が履修することになった。農業学習において体験活動を伴う学習は、学習者の意識形成に関して効果的な役割を果たすと考えられる。また、学習者の農業教育に対する意識や関心は、農業に対してどのような評価をしているか、あるいは価値づけを行っているかによって規定されるものと考えられる。

そこで、本研究では、中学校に着目し、学習者は農業学習に対してどのような価値意識を形成しているのか実態を明らかにし、この実態から有効な学習指導の提案を目的とした。

2. 研究方法

学習者の農業学習に対する価値意識を明らかにするために、成績やテストの評価を気にすることなく自由な学習者の表現を得るために自由記述による調査を実施した。また、なるべく著者らの主観的な枠組みが反映されないように、テキストマイニングのソフトウェアを用いることにより学習者の自由記述を客観的に分析することを試みた。

調査は、中学生を対象にして、農業に対する価値意識に関する属性調査と自由記述回答による調査を2014年2月に実施した。滋賀県、石川県の中学生318名を対象に調査を実施し、有効回答数311名分（有効回答率97.7%）の回答を度数分布とテキストマイニングにより分析した。

3. 結果

農業体験に対する興味について度数をまとめると、とても興味ある生徒は16%、少し興味のある生徒は38%で、どちらでもない生徒は33%、あまり興味のない生徒は8%、全く興味はない生徒は5%であった。テキストマイニング分析の抽出に際しては、これらの生徒の興味を属性として各群の分析を試みた。各群の自由記述回答による調査結果をテキストマイニングにより分析し最頻出語を抽出したところ、興味のある群では「感謝」、「気持ち」などの語が認められ、興味のない群では「お金」という語が認められた。興味の度合いに応じて、学習者の表現する価値意識が異なることから、これらを有効に活用した学習指導の検討が可能であることが示唆された。

中山間地域行政における地域担当職員制度の導入と課題

神戸大学大学院／篠山市・山内 俊秀
神戸大学・中塚 雅也
神戸大学・布施未恵子

近年、中山間地域においては、少子高齢化の進展や地域課題の広域化等への対応として、地域力を活かし地域課題の解決を図る地域自治組織の設立が進められてきた。行政職員が主業務とは別に、担当地域を持ち、その支援を行う「地域担当職員制度」は、その人的な支援策として導入されてきたが、位置づけや役割が明確でないことが制度運営上の課題となっている（川口ら，2010）。そこで本研究では、地域担当職員制度の望ましいあり方を探ることを目的とした。具体的には、事例比較分析をもとに、地域担当職員制度の実態を明らかにすること、および、制度設計と職員の活動実態の関係性の把握、設計上の要点と課題を明らかにすることとした。

事例対象地は、小学校区等を範囲に地域自治組織が設立されている兵庫県朝来市、丹波市、篠山市の3市とした。調査としては、①制度の内容と運用について、行政（制度担当課）職員へのヒアリング調査（2012年7月～2013年6月）をおこなうとともに、②職員の活動実態と意識について、地域担当職員（3自治体、各2名）へのヒアリング調査（2013年6月～12月）をおこなった。

その結果、制度として、朝来市、篠山市、丹波市の順に職員の活動を保障の程度が高いことなど、各市の制度の特性がそれぞれ明らかになるとともに、3市に共通して、担当職員は、地域と行政とのパイプ役として機能しているものの、明確な指標が見えにくい中での抽象的な業務となっていることがわかった。また、職員の待遇、慣例の差異、それらが、職員の満足度や働きやすさ、パフォーマンスに影響していることが考察された。

これらのヒアリング結果を踏まえ、定量的に、活動量や活動内容、職員の意識を把握することを目的に、③地域担当職員（朝来市44人、丹波市66人、篠山市109人）へアンケート調査をおこなった（2013年12月実施、回収率70.8%）。結果、活動の実態として、朝来市、丹波市、篠山市の順で支援活動の頻度が高いことが確認された。また、地域への愛着感は全市に共通して高く、地域担当職員が、報酬の有無に関わらず愛着をもって取り組んでいることが示唆された。活動内容については、丹波市および篠山市に比べて、朝来市の方が、総合的な支援をおこなっていること、業務に対する意識やコミットメントも高い数値を示していることが確認された。さらに、地域自治組織と目標を共有する等、地域とのつながりを意識した運用も朝来市でしかみられなかった。これらの結果から、職員の活動保障や運用面での工夫が、活動の頻度や内容に影響を与えていることが改めて定量的に確認された。一方で、活動支援の技術・ノウハウの獲得については、それまでの職場での実務経験や地域での活動経験が大きく関係しているという結果が得られるなど、地域担当職員制度の技術・ノウハウを職場内で共有できるような仕組の構築が、当制度の課題の一つであることがわかった。

Gender Analysis of Access to Credit among Farming Households in Nupe and Yoruba Cultures of Nigeria

Kinki University, Ajadi Adebola A.
North West University, O.I.Oladele
Kinki University, Koichi Ikegami
Kinki University, Tadasu Tsuruta

This study employs a gender analysis approach to clarify the access imbalance to credit among the farming households in Nupe and Yoruba cultures of Nigeria. Specifically, this study aims at identifying sources of credit available to the individual farmer, as well as who makes decision to borrow from which source(s) and how to spend the borrowed money. As credit involves all advances released for farmers' use, not only form in cash but also one in kind like 'cow bank' can be regarded as credit. In addition, the sources of credit are variable. They contain not only formal source such as bank and financial institution but also informal sources such as friend and relatives, Non-Governmental Organizations (NGO) and illegal lenders.

Agricultural credit is among the essential factors needed for agricultural production, and with it, farmers can secure farm inputs such as; farm equipment and hired labour. Nevertheless, lack of access to credit is frequently pointed as one of major reasons for underdevelopment of agriculture in the developing countries. This understanding is correct within the formal credit for agricultural production. However, actually, farmers have variety source of credit and they may spend it on various purposes. Furthermore, the previous studies have seldom taken gender divide of credit into consideration. As the formal credit is generally targeting households, not individuals, in the rural sector, female farmers have been neglected for a long time. This paper intends to contribute to redeem this fault based on a case study in Nigeria.

Data were collected in Patigi Local Government Area of Kwara State in 2012 with the aid of structured questionnaires, administered on 100 respondents using a simple random sampling. The result of research shows that the major sources of credit are from friends and relatives and group based micro-finance. Even informal lenders with high interests occupy large position. Decision to borrow and use of credit from the listed sources were majorly made by male. However, we can find that female can decide on money from formal lender and group-based micro finance with higher percentage than money from other sources. The latter may be related with domestic use of borrowed money such as child education, health care, food and ceremony.

The purpose and the source of credit are different in accordance with gender and family status. Accordingly, it is necessary to study problems on credit on the context of daily life as well as from the viewpoint of production with a scope of gender divide.

ガーナ北部における 小規模ため池を利用した稲作の社会経済条件

国際農林水産業研究センター・小出 淳司

国際農林水産業研究センター・岡 直子

国際農林水産業研究センター・藤本 直也

本個別報告は、都市部を中心に近年コメの需要が増大し、増産が望まれているガーナ国の天水低湿地において、小規模ため池の水を稲作に利用する場合の社会経済条件を探ったものである。対象地域であるガーナ北部のタマレ近郊には、ダッグアウトと呼ばれる掘り込み式の小規模ため池（以下、ため池）が多数存在するが、稲作に利用する例は見られない。そこで、低湿地の稲作およびため池の存在が確認されたタマレ近郊の3村を対象に、2014年2月に各村の首長や稲作農家を対象とした聞き取り調査を行い、ため池を稲作に利用する上で重要と考えられるため池の水利用慣行、稲作農家の経営実態、意向、農民組織の活動内容などを把握した。主な結果は以下の通りである。

まず、ため池の水は主に村民の生活用に利用されているが、乾季の末に不足する傾向にある。このため、貯水を稲作に利用するにはまず生活水の確保が必要となる。また、ため池は村の首長などを中心に管理され、既存のルールに沿って利用されているものの、ため池の水不足に備えるための水利用調整は行われていない。現在、水争いは生じていないが、貯水を稲作、更には稲作農家の多くが志向する野菜作にも利用する場合、水争いが生じたり、利用者間の利害調整を行うための体制作りが必要となる可能性がある。また、ため池の維持管理に必要な資材やその移送手段が不足している例もあることから、これらに備える資金を徴収・管理するための体制作りも重要と考えられる。

次に、実際にため池を利用して稲作を行う場合、耕起や畦の設置などにかかる労働節減、畑作との整合などを図ることが特に重要であることがわかった。また、これらを実現する上では、役牛やトラクターの借用資金を確保することが一つの条件である。この他、コメ収量の変動要因として、降雨の不安定性だけでなく、化学肥料や除草剤の購入資金の不足を挙げる農家が多いことから、これらの購入資金の確保も重要と考えられる。

調査村内には水道敷設による生活水の確保や、営農資金の確保を目的に活動する農民組織が存在するが、これら既存の組織は設立後間もないものが多く、活動が継続的に行われるか不明である。そのため、これまでに述べたような生活水の問題、およびトラクターの借用資金や化学肥料、除草剤の購入資金といった営農資金の問題が、農民組織の形成を通じて解消される見通しは不透明である。過去の農民組織の崩壊事例を踏まえると、組織の活動資金の管理体制や、活動目的に合致した組織支援を行う外部主体とのつながりなどに注意する必要がある。

紛争後のスリランカにおけるタミル人世帯の生計再建戦略

ー北部州マナー県の事例よりー

名古屋大学大学院国際開発研究科・原田 智子

2009年に内戦が終結したスリランカでは様々な復旧・復興事業や帰還民への再定住支援が実施されてきたが、戦闘地となった北部州では貧困世帯が多いことが報告されている(WFP, 2011)。世帯の資産レベルは将来的な生計水準に影響し、慢性的貧困の原因になるという指摘もある。こうした中、紛争により資産を喪失した世帯が慢性的貧困に陥らないようにするために世帯の生計再建を支援することが重要な課題となっている。

本稿の報告者によるこれまでの研究では、生計の再建状況に差異が生じていることが明らかになっている。また、生計の再建状況の差異は、復旧・復興事業の実施および再定住支援の受益の有無や村の地理・社会経済的な条件の違いだけでは十分に説明できないことも明らかになっている。このような状況を踏まえると、紛争後の世帯の生計再建を効果的に支援するためには、世帯の生計再建過程を分析し、生計再建状況に影響している要因を明らかにしていく必要があると考えられる。

途上国の農村居住世帯はショックやリスクに対処するために様々な生計戦略を採用している(Ellis, 2000)。先行研究では、生計戦略の違いが所得や資産レベルなどに影響することが明らかにされており、世帯が生計戦略を採用する際に障害となる要因が存在することも示されている(Ellis, 2000など)。紛争中に資産を喪失した世帯も、生計を再建するために様々な戦略を採用していると思われる。そして、生計再建戦略の違いが生計再建状況に影響している可能性があり、世帯の生計再建に影響している要因を考察する際には生計再建戦略にも着目する必要がある。しかし、紛争後の世帯の生計再建戦略に焦点をあてた研究は極めて少なく、紛争中に資産を喪失した世帯がどのような戦略を採用し生計を再建しているのかは十分に明らかにされていない。

そこで本研究では、スリランカにおけるタミル人世帯の紛争後の生計再建戦略の特徴を分析し、生計再建戦略と生計再建状況の関係について考察することを目的とする。分析には、マナー県で紛争中に戦闘地域となった2郡から6村を選定して実施した悉皆調査(212世帯)により得られたデータを利用する。

引用文献

- Ellis, F. (2000) *Rural Livelihoods and Diversity in Development Countries*. Oxford: Oxford University press.
- WFP (2011) *Food Security in the Northern, Eastern and North Central Provinces, A Food Security Assessment Report Sri Lanka*, April 2011. Hector Kobbekaduwa Agrarian Research and Training Institute, Ministry of Economic Development and United Nations World Food Programme.

ベトナム産ロブスタ種コーヒーのフードシステムの実態

—生産から輸出までの連鎖構造を中心に—

京都大学大学院農学研究科 林 和哉

【1. 本研究の問題意識】

1990年代からベトナムのコーヒー産業は飛躍的な発展を遂げ、ロブスタ種（主にインスタントコーヒーに利用される）に関しては世界一位の生産国となった。ベトナム中部高原が主要な産地で、国全体のほぼ90%のコーヒーを作っている。ベトナムでは1次産業がGDPの約20%、就業人口の約50%、輸出総額の約30%（輸出総額の14%は農産物）を占めており、農産物輸出総額の約20%を占めるコーヒーは重要な輸出作物である。参考文献1で長は、「ベトナムコーヒーは品質が劣り輸出単価が低い」「品質問題と流通システムは密接に関係している」という2点を指摘している。ベトナム、特に中部高原の今後の経済発展を考える上で、ロブスタ種コーヒーのフードシステムの実態の把握（主に品質問題と流通システムの関係）、及びその問題点（主に低品質、低価格）の分析が求められる。

【2. 分析の枠組み】

参考文献2で新山は、「連鎖構造」「競争構造」「企業結合構造」「企業構造・企業行動」「消費構造と消費者の状態」の5つの副構造を解明する、フードシステムの分析枠組みを提起している。副構造の1つの「連鎖構造」は、「構成産業主体」「取引の態様（取引形態、リスクシェア・価格形成システム）」から構成される。それは、食料品の生産から輸出までの「システムの構成主体」と、その相互の「取引の態様」として捉えることができ、特に「垂直的価格調整システム」を明らかにすることで捉えることができる。

本研究は、この分析枠組みを用いて、ベトナム産ロブスタ種コーヒーのフードシステムの生産から輸出までの「連鎖構造」について解明するものである。現地調査の結果、及び先行研究のデータを基に、まず「システムの構成主体」を明らかにして、フードシステムの概観を把握する。そして、それを基に各主体の取引の態様（主に取引形態、価格形成システム）と、さらに新山が重視している「品質調整システム」について分析を行う。

【3. ベトナムコーヒーのフードシステムの概観】

生産から輸出までの流通経路は基本的に、「①農家」→「②産地仲買人」→「③民営集荷業者」→「④海外商社」となっている。生産においては、1ha程度の小規模農家が生産の大部分を生産している。収穫されたコーヒーは、農家が乾燥して生豆の状態にして売り渡す。基本的に①～④の各主体は契約取引を行い、量の安定確保を図る傾向が強い。民営集荷業者は買付後、自社工場でコーヒーの選別、殺菌消毒、コンテナ収納等の処理を施す。そして、主にアメリカ、及びヨーロッパの海外商社と取引を行う。基本的にコーヒーの輸出価格決めでは、海外商社の交渉力が強く、海外商社の希望が通りやすい傾向にある。

【参考文献】

- 1) 長慶次 (2005) 『市場経済下のベトナムの農業と農村』 筑波書房
- 2) 新山陽子 (2001) 『牛肉のフードシステム』 日本経済評論社

Host Residents' Attitude toward Community-Based Ecotourism: Empirical Evident from Three Sites in Cambodia

Graduate School of International Development, Nagoya University

Seyhah Ven

Since the late 1980s, tourism researchers have paid much attention to understanding host residents' attitude toward tourism development because one of the factors for the success of tourism development which was identified by both scholars and practitioners is host resident attitudes (Deccio & Baloglu, 2002). Particularly in Cambodia community-based ecotourism (CBET) sites have been initiated and supported by many nongovernmental organizations as well as governmental agencies in order to conserve the natural resources and generate additional income for the local people, since the 1990s. The livelihood of the host residents can be significantly influenced by these CBET sites while their attitudes are vital to the success and sustainability of these CBET. Consequently it is necessary to study the residents' attitudes to CBET.

Main objective of these study is to develop models regarding the residents' attitude toward CBET. The models would provide answer to three research questions, specifically (1) what are the direct and indirect determinants of perceived impacts? (2) What are the direct and indirect determinants of support for CBET? And (3) what are the association among perceived impacts and support for CBET. Stratified sample data were collected from three successful CBET sites, namely Chambok, Chi Phat, and Yeak Loam CBETs. 600 residents from all research sites were interviewed using structured questionnaires. The hypothesized models were specified based on the social exchange theory, previous research, and the author's justifications for inclusion of some additional factors into the model. The 2-stage structural equation modeling was used to test the specified models. In the 1st stage, confirmatory factor analysis was used to build measurement model so that unidimensionality of each factor was attained. In the 2nd stage, structural models were tested by examining model fit indexes, remodification indexes and parameters' sign and z value.

The results of this study revealed that the direct effects of perceived impacts on livelihood assets were community attachment (at Yeak Loam), community concern (at Chambok and Chi Phat), emotional solidarity (at Chambok), tourism dependency (Yeak Loam), natural resource dependency (Chi phat and Yeak loam), socio-economic status (Chi Phat). The direct effects of perceived impacts on livelihood outcome were perceived impacts on livelihood assets (all sites) emotional solidarity (Yeak loam), natural resource dependency and CBET knowledge (Chi Phat), and environmental knowledge (Yeak Loam). The direct determinants of support for tourism were the perceived impacts on livelihood outcome (Chambok) and perceived impacts on livelihood assets (Chi Phat), community concern and ecocentric attitude (Yeak Loam), tourism dependency (at Chambok and Chi Phat), and natural resource dependency (Chi Phat).

In conclusion, in addition to the determinants of residents' attitude to tourism found by previous studies, this research also showed that natural resources dependency, CBET knowledge, environmental knowledge, and level of socio-economic status (as a construct) also influence residents' attitude toward CBET. However the findings of the three sites were mixed. This suggests that there may be no single common model which can reflex residents' attitude toward CBET for all sites. One factor can be a determinant of attitude toward tourism at one site, but it may not elsewhere.

The Competitiveness and Cost Efficiency of Rice Farming In Indonesia

Graduate School of Agriculture, Kyoto University, Ernoiz Antriyandarti

In the recent mid-term five years development plan, Indonesian government attaches importance to food security and plans to achieve self-sufficiency of rice despite the lack of global competitiveness of rice sectors. Indonesian rice policy, however, is criticized by Western economists because the current rice policy distorts resource allocation, discourages technical progress, and generates a large budget deficit. And if she will make a free trade agreement with ASEAN countries in the near future, she cannot help liberalizing the current protective rice policy. Under such a circumstance, Indonesia will have to make efforts to enhance the productivity of rice if she wants to enjoy the benefits of Free Trade Agreements.

This paper aims at examining the effects of cost efficiency improvement on global competitiveness of rice sector in major rice growing areas of Indonesia. For that purpose, we estimate cost inefficiencies in those areas by a stochastic frontier cost function model, using PATANAS panel data. And we also estimate the impacts of the cost inefficiencies on the indicators of global competitiveness (domestic resource cost; DRC) to examine whether the improvement of cost inefficiency leads to global competitiveness or not.

This paper makes two significant contributions. First, it is the first study that aims at examining the impacts of efficiency improvement on global competitiveness of Indonesian rice. Second, it is among the few studies measuring the cost efficiency of Indonesian rice, by applying a stochastic frontier approach using cost function model and using PATANAS data which contain rich panel data of production cost in five provinces that are the main rice producing areas in Indonesia, instead of using the production function model.

The main results of analyses are as follows: (1) the estimation results of cost inefficiency show that the cost efficiency is higher in Central Java and East Java of which farm size is relatively small; (2) however, the estimation results on global competitiveness show that the rice sectors in Central Java and East Java which are the main rice producing areas have no comparative and competitive advantages; (3) cost efficiency and farm size have positive effects on the global competitiveness in all of the provinces.

From the second and third estimation results, we also find that even if we can deal with the cost inefficiencies of rice farming in Central Java and East Java significantly, the rice sectors in these areas cannot obtain global competitiveness.

These results of analyses imply that for Indonesian government to achieve food security under the pressure of trade liberalization, she must not only implement the policies for handling the cost inefficiencies through the development of irrigation system and land consolidation, but also devise some additional policies such as facilitating enlargement of farm size, particularly in Central Java and East Java.

Keywords: DRC, Stochastic Frontier Function, Indonesian Rice Policy, Cost Inefficiency

トルコ農村部における社会慣習に関する意識形成

- アダナ県低平地地域を事例として -

一橋大学・丸健

東京農工大学・草処基

現在、トルコ共和国は順調に経済成長を続けている。その一方で、女性の社会進出は他のEU諸国などと比べて遅れており、その改善が大きな課題となっている。経済発展の波は農村部にも波及しつつあるが、農村部では、女性隔離の伝統的社会規範に基づく慣習と近代的な性分業として専業主婦という職業の浸透が、女性の外部労働参加を低下させる要因となっていると考えられる。本研究と同じトルコ・アダナ県を対象とした既往研究においても、社会慣習が農家行動、特に女性労働参加に対して影響を及ぼしていることが指摘されている。

上記既往研究を含め、経済学の分野から社会慣習を扱った研究の多くは、社会慣習を家計内資源配分などの農家行動に影響を与える要因として捉え、所与のものとして扱っている。しかしながら、農家行動に影響を及ぼす社会慣習は固定したものではない。分析対象地域では、古くから成立していた村と、比較的新しく成立した村とで、住民の構成やその流動度に差異がみられる。古くから成立していた村では外部に対する閉鎖性が高く、そのような地域では社会慣習も古くからのものが残存している可能性が高い。また、灌漑設備の充実度や土壌条件によって作物選択にも差があり、シトラスのような収益性が高いが労働集約的な商品作物を生産可能な地域では多くの外部労働者を受け入れるため、社会慣習も変化する可能性がある。この作物選択も灌漑設備の新規導入や政策による奨励作物決定によって変化する可能性が高い。加えて、村内の農家が受けてきた教育や既に保有している財産のような、村を構成する住民の属性やその同質性も社会慣習に対して影響を与えるものとして考えられる。

そこで本稿では、トルコ共和国農村部を事例に、農家行動に影響を及ぼす社会慣習に関する農家意識がどのように形成されるのかを研究課題として取り上げる。家計調査で収集したデータを用いてまず村の属性や各家計の属性などを、次に予算決定や女性労働に関する権限のような社会慣習に関連する農家意識を整理し、これらを用いて社会慣習に関する農家意識の形成過程を分析する。

第2会場

2-1	建設業による水田農業への参入と財務分析 中村翔 他(高崎経済大学)	2-10	中山間水田作経営における放牧畜産導入の効果と課題 千田雅之 他 (中央農業総合研究センター)
2-2	集落営農法人関係者の出役意欲に及ぼすソーシャル・キャピタルの影響に関する一考察－鳥取県及び広島県を事例として－ 入江祐太 他(鳥取大学大学院)	2-11	耕畜連携における飼料用稲新品種の地域経済波及効果－広島県神石高原町を対象とした産業連関分析－ 友國宏一 (近畿中国四国農業研究センター)
2-3	農業経営体の購買取引における課題 木原奈穂子(京都大学大学院)	2-12	集落営農における農法選択に関する一考察 -コウノトリ育む農法を事例として-
2-4	中国大都市近郊農村地域におけるインターネット未利用者の利用障壁と利用のための条件 包 薩日娜 他 (京都大学大学院)	2-13	日本におけるリゾット用米生産に関する考察 笹原和哉 (中央農業総合研究センター)
2-5	内モンゴルの「生態移民」における牧畜経営の変化 包 翠栄 他 (愛媛大学大学院)	2-14	南九州畑作地域における畑地高度利用技術の経営的評価 -ダイコン-サツマイモ畦連続使用栽培体系を対象として - 房安功太郎 他 (中央農業総合研究センター)
2-6	園芸産地における出荷調整に関する一考察－福井県の梅産地を事例として－ 川崎訓昭(京都大学大学院)	2-15	トマト農家による加工・販売事業の取り組みと課題 堀江達哉 (近畿中国四国農業研究センター)
2-7	青果物営業における JA グループの人材開発の現状と課題 上田賢悦 他 (新潟大学大学院／秋田県農業試験場)	2-16	若年無業者支援における農業の導入実態と今後の展開 中本英里 他(愛媛大学大学院)
2-8	ネットスーパー利用に関する文脈価値の分析 滝口 沙也加 他(新潟大学大学院)		
2-9	オーガニックファーマーズマーケット発展のための運営の要点 尾島一史 他 (近畿中国四国農業研究センター)		

建設業による水田農業への参入と財務分析

—大分県北部地域のB法人グループの実態分析より—

高崎経済大学地域政策学部・中村翔・荻野淳一・坂口健太

高崎経済大学・宮田剛志

日本経済再生本部『日本再興戦略 改訂 2014 - 未来への挑戦』では、2022年度までの課題として経済の再生と財政健全化の同時達成が求められている。その中で、農業の成長産業化を推し進めるため、企業の活力やノウハウを活用するとともに、企業による農業及び農業関連産業への参入が掲げられている¹⁾。こうした状況に先行し、2009年の農地法改正では企業による農業参入の規制が緩和され、地域農業の担い手不足を背景に、その数は増加し続けている²⁾。佐伯・宮田³⁾では、大分県北部地域で2002年度に水田農業に参入した建設業の法人グループを取り上げその実態分析を行っている。そこでは、農業生産法人であり、2008年度の作付面積約65haの有限会社B法人(B法人と略記)を主な分析対象とし、法人の『作業日誌』や聞き取り調査等から法人グループ・地域の畜産農家からの出役を前提として、作業体系が確立していることを明らかとした。主要機械の多くを畜産農家に依存し、B法人は補助的な作業を担っているにすぎなかった。そこでは、また、建設業と農業が年間を通じてそれぞれ就業の場を提供し合っていた。しかし、再度の政権交代を経た上で政策の展開により、B法人では農業部門のみで周年就業を確立するに至っている。そこで本報告では、佐伯・宮田³⁾で取り上げたB法人を主な分析対象として、農業部門のみで周年就業が確立された後の作業体系の変化や法人グループ・畜産農家間における資源移動、収益性や財務内容の安定性についての3点を明らかとすることを課題とする。その際、B法人等の2009年度から2013年度までの『作業日誌』や『決算書』、聞き取り調査等から分析を行う。B法人では新卒の採用や外国人技能修習生の導入が図られる一方で、機械装備に関しては補助事業、収益に関しては助成金、短期の安全性に関しては建設業等からの融資も受けていた。今後、補助金、助成金、建設業等への依存度を低下させつつ事業をいかに安定的に展開させていくか、否かを長期的に観測していく必要がある。

1) 日本経済再生本部^[1]

2) 盛田・高橋^[2]

[引用文献]

[1] 日本経済再生本部(2014):『日本再興戦略 改訂 2014 - 未来への挑戦』pp.1-2, p.108.

[2] 盛田清秀・高橋正郎(2013):「異業種参入の農業展開の背景と実態」『農業経営への異業種参入とその意義』pp.6-7.

[3] 佐伯洋輔・宮田剛志(2011):「建設業による水田農業への参入と周年就業の実現」『農業経営研究』49(2), pp.93-98.

集落営農法人関係者の出役意欲に及ぼす ソーシャル・キャピタルの影響に関する一考察

—鳥取県及び広島県を事例として—

鳥取大学大学院・入江祐太
鳥取大学・松村一善
鳥取大学・小林 一

2007年より開始された品目横断的経営安定対策を契機として、経営的な発展を目的とした集落営農の組織化が進んでいる。しかし、近年では集落営農の経営展開が進む過程で構成員の組織への関心の低下といった集落営農のジレンマ問題、それに伴う集落営農の世代交代の停滞といった問題の発生が指摘されており、構成員及びその世帯員の出役意欲を維持向上させるための対処が求められている。集落営農の出役に関しては、集落営農における労務管理等を含めた組織管理の重要性が先行研究で示されている。一方、集落営農は生産と生活の場が共通であり、集落営農への出役に関しては、組織内で形成される社会関係を考慮する必要がある。例えば小林（1996）は、集落の人的関係の諸問題を解決することが集落営農の問題を解決する一助となることを指摘している。また高橋（2003）は、主業農家不在地域に展開する集落営農の出役論理として組織運営コスト（仲間意識醸成のための費用）の重要性を述べている。以上のことから、集落営農関係者の出役意欲を向上させるためには、組織管理以外にも組織内における社会関係（組織内のネットワーク、信頼、互酬性の規範）を鑑みる必要があると考えられる。組織内の社会関係に関しては、集落の協働力を示す指標としても扱われるソーシャル・キャピタル（以下SC）を用いた検討が行われている。SCと集落営農に関しては、例えば農林水産省（2007）が全国の農業集落を対象としてSCと集落営農の組織化の関係性を見ているが、あくまでも組織を単位としてSCとの関係を見たものであり、構成員単位での詳細な分析はなされていない。そこで本報告では、集落営農法人関係者の出役意欲に及ぼすSCの影響を分析することを目的とする。

分析対象として、広島県と鳥取県の法人格を有する集落営農を取り上げる。理由として第一に、法人化することによって一定水準の財務管理、労務管理を含めた組織管理が行われていると想定されるからである。第二に、両県の集落構造及び形態が異なり、集落営農を構成する集落数や経営面積に違いが生じているからである。広島県は1農業集落当たりの農家数が少なく、集落営農としての規模の経済性を創出するために複数集落もしくは大字を単位とした集落営農法人の組織化が多いのが特徴である。鳥取県は1農業集落当たりの農家数が多く、1集落による集落営農法人の組織化が特徴である。そこから両者の組織内におけるSCや組織運営に違いが生じていると考えられる。

分析には、広島県及び鳥取県の4集落営農法人の構成員及びその世帯員を対象として実施したアンケート調査の結果を用いて、SC統合指数、SC構成要素と集落営農への出役意欲との関係性を明らかにする。

農業経営体の購買取引における課題

京都大学大学院・木原奈穂子

1. 研究背景と課題

昨今の農政改革に伴い、企業ノウハウを農業に活用することが目指されている。この改革において、農業経営体を中心となって地域ぐるみでバリューチェーンを構築し、農林水産物や食品の開発・ブランド化に取り組むことが求められている。マイケル・E・ポーターが競争戦略の中でまとめるバリューチェーンは、そもそも一経営体の事業における付加価値の創出である。農業経営体がバリューチェーンを構築するには新たなサプライチェーンを構築する必要があり、他事業者と取引を円滑に行うことが求められている。そこで、本報告の課題として農業経営体の購買活動に着目し、現状の購買活動の実態と農業経営体の新たなサプライチェーン構築に対する問題点を明らかにする。

2. 企業取引における取引条件と農業経営

一般的な企業取引は信用取引を基本とし、掛売りが行われる。掛売りでの取引においては取引条件があり、条件として挙げられるものに、①締日、②支払サイト、③支払方法がある。企業はこの取引条件を満たすことができるかどうかを事前に与信管理によって行い、取引条件を満たさない場合には取引を行わない場合もある。一度の取引金額が大きい企業ほど支払サイトは長くなり、現金よりも手形が選択される傾向にある。与信管理は厳しさを増しており、実際の取引としては支払サイトが短く、現金での取引がメインとなってきている。農業経営が購買活動を行う際、この取引条件を如何に提示するかが重要である。特に農業経営においては、農産物生産の特徴上、生産期間が長く、種苗購入といったインシヤルコストがかかる上に肥料や農薬の購入といったランニングコストも一定必要となる。

3. アンケート調査結果

企業による購買取引に対する取引条件を踏まえ、23の農業経営体の購買取引状況を聞き取った(2014年6月)。調査の結果から、農業経営体の購買取引は経営規模に関わらず多様化しているが、取引条件に関しては経営規模が大きくなるにつれ、取引交渉を行う傾向にある。取引条件の内容については、一般企業取引と比較して支払能力が高いとは言えず、企業との取引を阻害している可能性が高い。また、新規就農者の場合には農協から資材を購入していない場合が多いが、これは経営開始当初から農協との付き合いがなく、また取引条件を交渉することができないため、選択されていない可能性があることが分かった。

4. まとめと考察

アンケートによると、作付品目に対する知識を持っていることや営業マンに対する信頼、アフターケアなどを重要視する傾向もあり、必ずしも農協からの購入がそれを賄っていないことも、理由として挙げている。このことから、購買取引においては取引条件の他に、資材知識が重要であることも示された。

中国大都市近郊農村地域におけるインターネット未利用者の利用障壁と利用のための条件

北京近郊農村地域を事例として

京都大学大学院・包薩日娜
京都大学・星野 敏
京都大学・鬼塚健一郎
京都大学・橋本 禪
京都大学・清水夏樹

I 研究の背景と目的

中国において、「重工軽農」戦略により、「農村 - 都市」という二元社会構造が形成され「三農問題」が発生した。都市と農村の間で、所得、生活水準、教育、社会保障、公共施設整備の水準等の様々な面で格差の問題が生じ、深刻な社会問題となっている。政府は、その解決のために、「新農村建設」などの政策を進め、農村地域の発展を促進している。しかし近年、政府が推進する社会情報化プロセスのなかで、都市と農村間には、デジタル・ディバイド（インターネット（以下、ネット）普及率と利用率の格差）という新たな課題が生じつつある。デジタル・ディバイドにより、都市と農村の格差が一層拡大する可能性があり、農村地域のネット普及や利用促進という課題を解決することが重要である。本研究では、ネット利用のインフラなどのハード面が既に整っている大都市近郊の農村を事例として、ネット未利用者に注目し、ネットを利用しない理由と利用を開始する条件について明らかにすることを目的とする。

II 研究方法

本研究では、北京近郊農村地域である小湯山鎮を対象地域に選定した。2013年8月上旬から中旬にかけて、アンケート調査を実施し、243部を配布して、そのうち125部の有効回答を得た。本研究では、未利用者がネットを利用しない理由を、①経済的な理由、②知識、③身体状況、④メリット不明、⑤周りの影響、⑥現状満足の6つのカテゴリに分け、17項目を設定した。さらに、未利用者がネット利用に転じる条件について、新たに10項目を追加した。

III 結果と考察

本研究では、大都市近郊の農村におけるネット未利用者に着目して、ネットを利用しない理由を明らかにした。また、未利用者を類型化し、グループ別にネットを利用しない理由を把握した上で、未利用者が利用を開始する条件について検討した。その結果、対象地域においては、ネットを利用しない理由は経済的なものではなく、農村地域の高齢化及びネットに関する知識・無理解が影響を与えていることが明らかとなった。また、未利用者の類型化により、各類型においてネットを利用しない理由を詳細に把握し、どのような条件があれば利用に転じる意向があるかを分析した。農村住民のネット利用を促進するためには、各グループのニーズに応じた対応が必要とされる。

内モンゴルの「生態移民」における牧畜経営の変化

—桑根達来鎮の生態移民を事例に—

愛媛大学大学院連合農学研究科・包 翠栄

愛媛大学・胡 柏

内モンゴルは中国北方に位置する伝統的な牧畜地域である。1980年から1990年代にかけて家畜と放牧地の請負制度が実施された。それより家畜頭数が急増し、草原退化を引き起こした。一方、2000年以降の3年間、内モンゴルでは大旱魃が続き、草原退化・砂漠化が深刻化した。その結果、黄砂や砂嵐の発生回数が増加し、現地住民の経営や暮らしに大きな影響を与えた。こうした状況に対処するため、2001年から「生態移民」政策が導入された。環境保全への配慮を前提とした生活環境の改善及び所得向上を目的とした政策である。具体的には、草原の生態環境が悪化した地域の住民を都市近郊に建設された「生態移民村」(乳牛村)に移住させ、経済性の高い乳牛を飼育させることにより、所得向上による生活改善と、農牧民が所有する放牧地の環境保全を同時に図ることである。

「生態移民」政策の実施にともない、農牧民は経営形態や生活様式の変更を強いられ、移住後農業所得が大幅に減少したことは多くの研究者が指摘している。その後、一部の農家は所得低迷を乗り越え、所得向上に成功したケースもあれば、多くの農家は乳牛飼育をやめ、元の居住地に戻るか出稼ぎするケースも多い。

本稿では、移民後の所得低迷を乗り越え、乳牛飼育を継続している農家を対象に聞き取り調査を実施し、移民前(2002年)、移民後(2006年)、現在(2012年)の比較分析から移民前後の経営や収益変化を分析し、経営形態別の比較から生態移民の経営実態を明らかにし、所得向上の要因を探る。

本研究では明らかになった点は以下の3点である。第1に、「生態移民」政策の実施により、農牧民の経営形態や生活様式が変容し、移住直後農業所得が大幅に減少した。その後、一部の農家は乳牛頭数を増やし、所得を確保することができた。第2に、経営形態別の比較では、黄牛・乳牛飼育の方が乳牛のみ飼育より所得が高いことが明らかになった。第3に、利用可能な放牧地の面積が大きいほど農業所得が高いことが明らかになった。

園芸産地における出荷調整に関する一考察

ー福井県の梅産地を事例としてー

京都大学大学院 川崎訓昭

1. 研究課題と分析方法

高度経済成長以降、国産農産物を原料とする消費者向けの食品製造業と他食品企業向けの食品素材加工業では、特に地方の中小加工会社の淘汰や再編が進んできた。その背景としては、所得の向上と生活様式の洋風化に伴う需要構造や原料依存先の変化や、加工・流通技術の革新などが指摘されている。

また、原料を栽培する農業においても、農協など地域を基礎として形成された農業組織では、農業生産や経営の構造的変化、農家の意識変化などを契機として、組織の統合や構成員の離脱が続いている。そのため地域内の人的資源の再配置や共同活動の実施主体である組織の再編を実施し、地域全体の生産効率の改善を図ることが求められている。

本報告では、加工原料の生産から加工までを行う梅生産地域である福井県若狭地域において、梅生産農家、集落に基礎をおく出荷調整組織である梅生産部会、JA 及びその加工工場の三者の関係を事例とし、原料農産物の過剰や不足が生じないように各主体がとる調整行動を分析することを課題とする。さらに、農家と農協、その中間に位置する部会の調整行動に関する理論的整理及びそのモデル化を行う。

2. 産地の概況と出荷に関する調整行動

福井県の嶺南地方に位置する若狭町三方地域は、県の「梅の里づくり推進事業」により、既存園の整備と生産性の向上、販売体制の充実、産地の広域化がなされ、現在では作付面積 200ha、収穫量 1,000t を超える産地を形成している。三方地域での生産量のおよそ 9 割は農協に出荷され、生果出荷や加工事業も農協を中心に実施されてきたが、生産地としての量的な拡大が終わり、さらに価格の低下といった外的な要因も加わり、地域全体の生産効率の改善のために、出荷調整と新たな出荷体制の構築が推進されている。

上記の産地概況をふまえ、各主体の利害関係の調整のあり方に焦点をあてるマイクロ組織論を援用した理論分析を行い、経営規模別に抽出した梅生産農家及び関係主体への聞き取りを行った。その結果、安定的な継続取引を図るために、農家自身が稲作や他の果樹作との複合経営に取り組むだけでなく、主体的に販売ルート of 拡大を図り、産地内での「限られた資源の稀少性」と「共通意識に生じる差異」への対応を図っていることが明らかとなった。また、中間組織としての部会が新たに設定した出荷数量の調整手法と規格外品への対処方法が、加工原料産地に発生しがちな生産者と加工業者間でのコンフリクトの調整に非常に有効に機能していることが明らかとなった。

青果物営業における JA グループの人材開発の現状と課題

新潟大学大学院／秋田県農業試験場・上田 賢悦
新潟大学・清野 誠喜

昨今の青果物流通を取り巻く環境変化のもと、一部 JA では量販店や外食・中食企業に対する直販事業への取り組みがみられ、JA による営業活動の必要性が高まっている。しかし、小売企業や業務系実需者への営業活動を直接経験した人材は少なく、試行錯誤での営業活動となっている。JA の営業活動における既存研究では、営業管理様式の変容や転換という営業改革の視点からの接近はみられるが、営業活動における人材開発の視点は乏しい。

そこで本研究では、JA グループにおける人材育成活動施策を俯瞰し、営農・販売事業において営業活動を担う人材開発の現状と課題を明らかにすることを目的とする。具体的には、JA グループにおいて人材育成活動に関する事業を中心的に担う JA 全中および JA 中央会、経済事業を担う JA 全農県本部（県経済連も含む）へのヒアリング調査により、課題に接近する。なお、営業活動の対象を青果物に限定し、JA 中央会および JA 全農県本部については、農業産出額構成比を考慮して、東北、甲信越、東海地方から計 4 県を選定する。

明らかになった結果は以下の通りである。

(1) 営農・販売事業における人材開発として、営業活動の知識獲得を目的に JA グループが展開する教育訓練は、①JA 全中・JA 全農が供給者となる off-the-job training (以下、Off-JT) への参加、②JA 中央会・JA 全農県本部等の地域の連合組織が供給者となる Off-JT への参加、③職場内研修としての on-the-job training (以下、OJT) に大きく分けられる。

(2) 営業は、販売を実現・継続させるために顧客を対象とした対外的営業活動に加え、生産部門への働きかけ・調整である対内的営業活動をも含むものである。上記①および②では、生産部会等への対応力を向上させる対内的営業活動のスキル習得に偏っており、対外的営業活動のスキル習得を目的とした Off-JT は決して多くはない。また、営業活動は、非定型的な業務スキルが多く、職場にそのノウハウの蓄積も少ないため、上記③においても組織的・継続的な OJT には至らず、営業担当者が個別・偶発的に「職場での実践を通じてノウハウを蓄積する」という経験主義にとどまっている。

(3) そうした中で、甲信越および東海地方の 2 県では、JA 全農県本部が単位 JA の営農・販売事業担当者を出向者として受け入れ、東京・大阪等の県外事務所に 2～3 年間配置し、営業活動を実践させる取り組みがみられる。出向者は、JA 全農県本部の担当者に同行し、販路開拓やルート営業等を通じて対外的営業活動のノウハウを蓄積させ、組織的・継続的な OJT を受けている。また、JA 全農県本部の担当者にとっても、農業生産に関する知識を持つ出向者から対内的営業活動について学ぶ点は多く、出向システムが営業活動の実践のもとに相互作用を通じながら学習を行なう「実践共同体」となっている。

(4) JA の営業活動における人材開発は、その多くが現場の経験だけで組み立てるという、OJT には至らない経験主義に依存しており、Off-JT においても生産部会等への対応力を向上させる対内的営業活動のスキル習得に偏っている。今後は、人材開発の質を担保するためにも、対内および対外という営業活動の 2 つの側面から構成された Off-JT を充実させるとともに、組織的・継続的な OJT を JA グループとして構築していくことが重要となる。

ネットスーパー利用に関する文脈価値の分析

新潟大学大学院・滝口 沙也加
新潟大学・清野 誠喜

小売業の新たな成長戦略としてネットスーパー事業が注目を浴びている。報告者らは、これまでネットスーパーを対象とした消費者の利用について、とくに他チャネルとの「使い分け」の視点からその実態を明らかにしてきた。ここでは、①ネットスーパーはそれ単体で利用されるというよりは、スーパー等の他チャネルと一緒に利用されているということ、②なかでも青果物は他チャネルとの併行利用のウエイトが高い品目として位置づけられること、がわかっている。

本報告は、「使い分け」としてネットスーパーを利用している消費者の背景や理由について、文脈価値の視点から明らかにする。方法としては、個人別態度構造分析 (Personal Attitude Construct, 以下, PAC 分析) を用いる。同手法は、臨床心理等の現場で用いられ、被験者の内面的な意識や態度を把握するのに適しているとされている。また、調査過程で作成されるデンドログラムにもとづきインタビューを進めるため、パーソナルインタビューでありながらも結果の再現性が高く、かつ安定的であることがメリットとされる。このことから、行動の「背景」や「理由」をより潜在的な部分で分析することが可能となり、日常生活の中での使用経験やプロセスを通じて実現される、文脈価値にアプローチできると考える。なお、分析対象者は、普段よりネットスーパーおよび、ネットスーパー以外の他チャネルでも青果物を購入している 30~60 歳代の首都圏在住者で、年代及び職業の有無を条件として抽出を行った計 8 名 (女性) である。

得られた結果は以下の通りである。

(1) PAC 分析の結果を、40 歳代の被験者 2 名を代表としてみると以下の通りである。被験者 C (無職) のデンドログラムは、「かしこい主婦」「義務的な (やらなくてはいけない) もの」「生協サービスの不便さ (ネットスーパーの優位性)」の 3 つのクラスターから形成されている。総合的な評価としては、“生活を楽しむために、上手に利用したいもの” と捉えられている。一方、被験者 D (有職) においては、「価格」「(青果物を購入する) 不安」「利用の条件」から形成される。そして被験者 D におけるネットスーパーは、“青果物は自身で鮮度を確かめたいので、あまり利用したくないもの” と位置づけられている。

(2) 全被験者の結果を総括すると、被験者にはネットスーパーを利用するそれぞれ固有の背景、目標が存在し、その目標を実現するために、調理時間と買い物の時間のバランスが考慮されていることが共通点として明らかになった。

(3) このことは以下のような意味を有する。ネットスーパー利用者は、一概に年齢や職業の有無などの属性では利用に至る背景は捉えられず、「目的-調理-買い物」(文脈価値) のバランスで捉えることが重要となる。そしてまた、そうした多様な生活スタイルを実現するためのツールとしての利用提案を図るコミュニケーション戦略が、ネットスーパーを展開する事業者にとっては今後重要となる。

オーガニックファーマーズマーケット 発展のための運営の要点

近畿中国四国農業研究センター・尾島一史
岡山大学・佐藤豊信
岡山大学・駄田井久

近年、オーガニックファーマーズマーケット（有機農業者自らが有機農業によって生産した農産物を販売する直売市）が増加しているが、解決すべき課題を多く抱えている場合が少なくない。一方、マーケットのコンセプトを明確にして、それを実現するために様々な課題に取り組み、解決することで発展している先進的な事例もある。こうした先進事例の課題への取り組みやそのなかで得られた知見は他の事例に役立つと考えられる。

本報告では、開設後一定の年数が経過し、活動の実績、効果をあげている先進的なオーガニックファーマーズマーケットを調査対象事例として、事例の課題への取り組みとその効果、実際に果たしている役割を検討することで、マーケットが発展するうえで重要な取り組みを明らかにし、それを運営の要点として提示する。

対象事例は、開催場所の立地条件が異なる、愛知県N市の中心部で活動している事例と、高知県K市の郊外で活動している事例である。愛知県の事例は有機農業者の販路確保を主な目的として2004年に開設され、毎週土曜日の8:30～11:30に開催されており、出店者数は約20～30戸/回である。高知県の事例は有機農業者の販路確保や地域活性化等を目的として2008年に開設され、毎週土曜日の8:00～14:00に開催されており、出店者数は約50～60戸/回である。両事例とも来客者数は約500～1,000人/回であり、増加傾向にある。

本研究の調査方法は、マーケットの関係者への聞き取り調査である。代表者と事務局には、マーケットの開催経緯と課題、活動の概要と効果等について調査を行った。出店者には、農産物販売状況、マーケットへの評価、運営への参画状況等について調査を実施した。

オーガニックファーマーズマーケットの運営においては、有機農業者自らが有機農業によって生産した農産物を販売していることについての信頼を確保することが重要である。また、出店者が対面販売を行うマーケットとしての課題（集客、出店者の確保、運営体制の確立等）に対処する必要がある。2つの対象事例では、前者については、マーケットのコンセプトを明確にし、それに基づいて出店基準を設定して、基準を守っていることの確認を行い、こうした活動について消費者に情報を提供していた。後者については、コンセプトに基づいて、開催場所の選定、開催日時の設定を行うとともに、広報宣伝等により来客者数、就農相談・研修等により出店者数の増加を図っていた。また、運営体制の確立については、ボランティアを活用しながら、事務局機能の強化に努めていた。対象とした2事例では、これらの事項に取り組むことで、実際に来客者数、出店者数を増加させ、開催目的である有機農業者の販路確保や、関係する地域の活性化（新規就農した移住者の増加等）に貢献していた。対象事例で取り組んでいる上記で示した事項は、いずれもオーガニックファーマーズマーケットを発展させるための運営の要点だと考えられる。

中山間水田作経営における放牧畜産導入の効果と課題

中央農業総合研究センター・千田雅之
近畿中国四国農業研究センター・渡部博明

主食用米需要の減少する中で、水田の有効活用と自給率の低い家畜飼料の増産をはかるため、水田の畜産利用の推進は重要なテーマである。このため、飼料用米や稲発酵粗飼料の生産利用が推進されているが、小区画の水田圃場が多く担い手経営の限られる中山間地域においては、放牧を用いた家畜生産の展開が、水田の省力管理と所得形成の有効な方法として期待される。

水田放牧は、山口県、広島県などを中心に着実に増加しており、近年は、耕種経営や集落営農と連携した水田放牧や集落営農自体が水田放牧を梃子に繁殖牛を飼養し始める事例が増えている。繁殖牛飼養農家数の減少のみならず子牛生産頭数の減少が懸念される中で、集落営農法人による繁殖牛飼養は子牛生産の新たな担い手としても期待される。しかし、家畜飼養経験の無い水稲作中心の集落営農法人において、繁殖牛の放牧飼養を前提とする子牛生産が円滑に行われるかどうかについては、不明点が多く検証すべき課題である。

たとえば、広島県三次市の7法人について放牧畜産導入の効果を尋ねたところ、耕作放棄地等の解消や圃場管理作業の軽減を5法人が評価する一方、法人収益の増加、就労機会の確保、獣害回避の効果については2～3法人の回答にとどまる。他方、放牧畜産実施上の問題点として、すべての法人で子牛の流産等の事故をあげ、3～4法人が放牧牛の捕獲・移動、牛舎での飼養管理作業、舎飼時の飼料確保、季節による放牧草の過不足、圃場の硬度化・耕起作業の負担をあげている。

本稿では、稲作と肉用牛の複合経営を営む集落営農法人を対象に、放牧畜産の実態と経営全体における成果および課題を明らかにする。事例のK集落営農法人は、中国中山間地域において経営面積34ha（内稲作23ha、水田放牧7ha）で繁殖牛15頭を飼養する。

まず、水田放牧による子牛生産管理の実態（放牧飼料の生産・利用技術および放牧実績、採草技術、繁殖管理および繁殖成績）を明らかにするとともに、農作業日誌をもとに農作業労働を分析し、水田放牧による子牛生産および水田管理省力化の程度を明らかにする。つぎに、簿記情報をもとに子牛販売および生産コストを分析し、水田放牧による子牛生産の収益性を明らかにし、収益改善に向けた課題を検討する。また、稲作に関わる作業労働および収益性と放牧畜産を比較し、水田作を中心とする中山間営農の将来展望に言及する。

その結果、子牛生産に関しては、放牧期間の飼養管理労働や費用は削減されるが、舎飼時に必要な飼料生産に費やす作業労働が多く、繁殖牛飼養に掛かる年間の作業労働時間は必ずしも少なくないこと、受胎率および子牛生産率が低いことため生産額が少なく収益性は低いものの、水田放牧に伴う交付金により法人所得が確保されていること等が明らかにされた。子牛生産の省力化および収益の改善をはかるためには、放牧期間中の可食草の安定供給を可能にする暖地型永年生牧草の導入、放牧期間の延長を可能にする飼料イネの利用、中型採草体系等による採草作業の効率化、成功報酬制度導入による繁殖管理技術の向上等が必要と考えらる。

耕畜連携における飼料用稲新品種の地域経済波及効果

－広島県神石高原町を対象とした産業連関分析－

農研機構 近畿中国四国農業研究センター・友國宏一

平成 23 年度に本格実施された農業者戸別所得補償制度のなかで、水田活用による戦略作物への助成対象として麦、大豆等とともに生産振興が図られた飼料用稲は近年、急速に作付面積が拡大しており、転作作物としての水田有効活用や飼料自給率の向上、さらには耕畜連携の取組みによる資源循環型農業の推進、地域農業の活性化等への効果が期待されている。

広島県では飼料用稲の作付面積が 5 ha 以上の耕畜連携の取組みは県内に 10 地区あり、また、県の栽培技術指導や専用肥料の開発支援等の推進により、稲WCS（ホールクロップサイレージ、発酵粗飼料）専用の多収品種として育成された飼料用稲新品種（「たちすずか」）の本格的な普及が開始されている。その結果、県内のWCS用稲作付面積の 90%以上を新品種が占め、その普及率は高く、一部地域ではそれまでの他の品種から全面的に新品種に転換を図る地域もみられる。そうした新品種の経営体への導入は、経営体における生産性の向上や生産物の高付加価値化等の直接的効果をもたらすことに加えて、導入産地においては農業生産額の増加や、関連産業部門に対する生産誘発、所得・雇用の創出等の経済波及効果をもたらすことが期待されている。

そこで本報告は、飼料用稲の新品種による耕畜連携を分析対象とし、新品種が地域において普及した場合の地域経済や他産業部門に与える影響を、産業連関分析を用いて定量的に明らかにする。具体的には、新品種の普及率の高い広島県内の耕畜連携に取り組む地域において組織・支援体制を含めた実態調査を行い、耕畜連携を構成する各部門（耕種、畜産、収穫調製作業受託等）の経済取引（中間取引・粗付加価値・最終需要）に関する投入産出構造を組み込んだ地域産業連関モデルを構築する。そのモデルを用いて、耕畜連携各部門の最終需要額（家計消費支出、固定資本形成等）等をシナリオに基づいてシミュレートし、地域経済効果を推計・分析する。

分析対象地域には 10 地区のうち作付面積が大きく、自治体とJAが連携して耕畜連携を推進している神石高原町を選定した。同町は古くからのブランド牛産地であるが、最近の肉用牛飼養は頭数横ばい、経営体数は急減している。耕畜連携の取組み経緯は、旧町村単位で実施していた堆肥センター利用による家畜糞尿堆肥の耕種農家への還元を、町への合併を契機に体制を一本化したことによる。現在の体制は町とJAが事務局となり、飼料用稲作付面積とWCS利用数量について事前に生産者と利用者に個別に調整を行い、収穫運搬についても事務局が町内コントラクター 2 社に作業量を調整・委託し、WCS全量が町内の畜産経営に利用される。すなわち、町の耕畜連携は行政とJAが作付面積と利用数量の需給を調整する機能を果たすことで展開されている。以上の耕畜連携各部門の調査から得られた投入産出データを、作成した町産業連関表の中に組み込んだ産業連関モデルによりシミュレーションを行い、経済波及効果を分析する。

集落営農における農法選択に関する一考察

－コウノトリ育む農法を事例として－

京都大学大学院・上西良廣

1. 研究目的と背景

近年、地域を代表する生物の復活といったストーリー性を生かした農産物の付加価値化の動きが日本各地において見られる。本研究は、そうした「環境アイコン」を生かした農産物のブランド化と関連して、集落営農が農法転換の合意形成に際して重視する情報的資源を明らかにすることを目的とする。事例として、兵庫県豊岡市における集落営農による「コウノトリ育む農法」（以下、「育む農法」）による米のブランド化を取り上げる。同地域では、近年、「育む農法」に取り組む集落営農を対象とした支援制度を創設するなど、「育む農法」の担い手として集落営農に注目しており、その農法選択の際に必要な情報的資源を明らかにすることは、今後さらに取り組みを拡大するにあたり有効な情報を提供することにつながると考えられる。日本人の米離れ及び米価の下落といったコメ生産を取り巻く環境が激化する中で、集落営農が環境アイコンを用いて農産物を地域ブランド化する取り組みは、地域活性化等の観点からその重要性が増すと考えられ、今後の集落営農運営に有効な選択肢となることが期待される。

2. 課題と方法

本研究目的への接近にあたり、慣行農法等から「育む農法」へと農法転換する際に、どのような情報を得たことが大きく影響したのかを明らかにすることを課題とする。具体的には、集落営農の構成員、組織構造や経営管理といった組織特性が、合意形成に際して重視された情報的資源の内容の違いにどのような影響を与えたのかを検証する。経営資源の中でも情報的資源に着目するのは、農法転換する際のリスクを軽減しうる機能を持ち、集落営農として決定を下す際に重視されると考えられるからである。ついては、集落営農の組合長等、農法転換の合意形成過程に深く関与した関係者に行った聞き取り調査、およびアンケート調査の結果から情報的資源と集落営農の特性に関する分析を行う。

3. 分析結果

各集落営農が農法転換の際に最も重視した情報を整理すると、二種類の情報が存在することが明らかとなった。第一は「育む農法」に取り組むことが、コウノトリの野生復帰活動につながるというコウノトリに関する情報、第二は「育む農法」に取り組むことで得られる経済性（米の単価・補助金）等の営農に関する情報である。また、集落営農が育む農法に取り組み始めた時期によって、これら二つの情報の重要度に違いが見られた。情報の重要度に違いを生じさせる要因としては、「環境保全型農業の経験」「追加的に投入できる労働投入量」等が関係していることがわかった。

日本におけるリゾット用米生産に関する考察

—北陸の中山間地を含めた大規模稲作経営における事例分析—

中央農業総合研究センター・笹原和哉

日本の稲作経営は、過去イタリア稲作技術と関わることはほとんど無かったが、近年イタリアのコメ料理であるリゾット用米に取り組む生産者が北陸（新潟県中越地方）に現れた。A法人は平地と中山間地を圃場として持つ。A法人は中央農業総合研究センターと共同研究を行い、日本の品種とイタリアの品種「カルナローリ」を交配したリゾット用米「和（なご）みリゾット」の試験、需要の開拓を行っている。イタリアの経営面積は平均50haであり、A法人の経営面積は48haであり、経営規模であまり変わらない。なお安武によると、10年後北陸地域の中山間地では50haを超える規模の担い手が必要になると予想されている。将来の担い手と目される事例の経営がイタリアの稲作技術に接したとき、どのように技術が採用されていくかが注目される。そこで、本報告は日本の農業経営では今後どうイタリアの稲作を受け入れ可能であるのか考察を行った。方法として、A法人に対して作業日誌等から策定した営農モデルのシミュレーション及び聴取調査から明らかにする。

A法人は2件の農業経営が組み、中核となって1990年から法人として発展してきた雇用型法人経営であった。出荷先として生協、ネット販売、3つの直売所、業務用米など幅広く展開している。従業員7名で、常勤の従業員で作業がほぼ完結している。圃場は筆数が200筆を超え、平均20a程度である。5月下旬から移植する「こしいぶき」「コシヒカリ」を基幹として生産し、5月上旬に移植する早生品種として「こがねもち」「ひとめぼれ」「越路早生」などを生産しており、主食用米は独自で精米後販売する。モチは加工して販売する。転作はエダマメ生産、酒米、飼料用米に取り組む。

営農モデルを策定して、「和みリゾット」を導入するシミュレーションを行った。現状の経営面積において、粗収益が10aあたり140,000円になるように設定した場合、早生品種の中で優位性があり、7ha程度採用される。「和みリゾット」が選択できない場合と比較して、約100万円の所得増加効果があった。

A法人のリゾット用米の需要開拓は、まずは地元イタリア料理店との契約栽培からスタートしており、現在需要の開拓に努めている。A法人は水稻直播の経験があるが、「和みリゾット」は品種開発段階から移植にて栽培され、A法人もこれを踏襲して移植している。5月上旬に作付され、8月下旬収穫する。この時期は早生の品種とほぼ同じである。ただし、胴割れ米が多く、実質的に収量が400kg/10a程度に低下する。なお胴割れはイタリアにおける「カルナローリ」にも多い。現時点での取り組みは一見イタリアからの輸入米に対する関税（基本402円/kg）の差を利用した高付加価値生産とも位置づけられるが、国産リゾットという新市場は、日本へイタリア稲作技術導入の契機になる可能性がある。

南九州畑作地域における畑地高度利用技術の経営的評価

- ダイコン-サツマイモ畦連続使用栽培体系を対象として -

中央農業総合研究センター・房安功太郎

九州沖縄農業研究センター・新美洋

中央農業総合研究センター・千田雅之

課題と目的 南九州畑作農業の特徴の一つとして、温暖な気候を利用した作物の周年作付け体系が挙げられる。例えば、夏作の代表的作物であるサツマイモに冬野菜や飼料用作物を組み合わせた二毛作等が一般的に行われ、高い土地利用率を達成してきた。しかしながら近年では、収益性の高い作物への傾倒、農家労働力の減少等の要因から作付けの単作化が進み、土地利用率が低下している。その結果、休閑地での難防除雑草の発生等の問題が生じている。また、農家経済の面では、全国的な野菜の供給過剰等により畑作の収益性が低下しており、所得の増大に向けた作付け体系が模索されている。このような状況を受けて九州沖縄農業研究センターが開発した「ダイコン-サツマイモ畦連続使用栽培体系」(以下新技術とする)は、南九州地域の基幹作物であるダイコンとサツマイモの二毛作に、畦間へのエンバク播種等の複数の要素技術を組み合わせた栽培体系である。その特徴は、1) 不織布二重被覆栽培により収益性の高い冬季のダイコン栽培を可能にしていること、2) 前作(ダイコン)の畦を後作(サツマイモ)にも連続して使用することでサツマイモ植え付け前の耕耘・畦立て作業を省略し、サツマイモ作の省力化を図るとともに作期の長い両作物の二毛作を可能にしていること、3) 畦間エンバク播種による雑草防除や有機質肥料の施与により、除草剤・化学肥料等の資材の使用量を削減していることである。このように、新技術は土地利用率の向上とともに、農家の収益増大や生産コストの削減・省力化を目的とした栽培体系であるが、生産現場での実用化に向けては技術の導入効果の定量的評価が必要である。そこで本研究では、新技術の現地実証試験農家であるA社(宮崎県都城市に所在)を対象とし、新技術の導入に伴う農業所得、年間労働時間、作付け体系の変化等を計測し、新技術の導入効果を明らかにすることを目的とする。

対象農家の概要 A社は親子2世代3名による家族経営であり、2007年に法人化した。経営耕地面積は19ha(水田5.5ha、畑13.5ha)であり、サツマイモ13ha、ダイコン-サツマイモ二毛作(新技術)23a、ニンジン-サツマイモ二毛作50a、主食用水稻4ha等の他、水稻の収穫作業等の受託を行っている。このような田畑複合の家族経営は、当該地域の代表的な経営タイプである。

研究方法 A社の作業日誌及び平成22年版宮崎県農業経営管理指針のデータを利用し、線形計画法(LP)の適用により(1)A社の現状の農業所得、年間労働時間等を計測するとともに、経営改善に向けた課題を整理する。(2)新技術を導入した際の作付け体系の変化、農業所得、年間労働時間等を計測し、(1)の結果と比較することにより、新技術の導入が経営にもたらす効果を明らかにする。

トマト農家による加工・販売事業の取り組みと課題

－ビジネスモデルの概念による分析－

農研機構 近畿中国四国農業研究センター・堀江達哉

近年のトマト作における加工事業には、農家が大手加工業者と契約栽培し原材料のみを供給する形態や出荷農家の規格外トマトの利用を目的にJAが加工施設を導入し加工・販売を担う形態が主なものとしてあげられる。一方で、農家や農業生産法人などが加工・販売事業を展開する事例も散見されるようになってきている。農業の6次産業化や農商工連携が課題となっているなかで、今後も加工・販売事業への取り組みは増加することが考えられる。しかし、農家などの生産者が加工・販売に取り組む際には、加工用の機械や施設の導入費用の負担、加工技術の取得と商品化、市場や販路の開拓といった点で、農業生産者としては経験のない様々なビジネスの問題に直面することが予想される。

そこで本報告では、トマト生産者の加工・販売の取り組みの実態を明らかにし、加工・販売事業における戦略や今後の課題についてビジネスモデルの概念を援用しながら検討する。主に中山間においてトマトの加工・販売を展開する事例を対象に調査を行い、うち6つの先進的な事例の加工・販売における取り組み実態を類型化し、問題点や対策を整理する。更にビジネスモデルの概念として、顧客価値創造、利益創出方法、利益実現のプロセスといった3つの構成要素を用いて加工・販売事業への取り組みを再整理し、類型毎の利益創出の枠組みを検討する。

事例から整理されるトマトの加工・販売事業における問題点は、(1)初期導入費用の負担と資金調達、(2)加工技術の取得と商品化に一定期間を要する、(3)適正生産量(規模)の確保とそれに応じた販売量の実現、(4)原料過不足時における生食用と加工用の調整方法、(5)トマトの収穫期と加工品の製造期間の競合による労働力確保、(6)市場設定と競合製品との差別化、(7)販路確保や開拓の困難性などがあげられる。これに対する方策として、①補助金等の利用や加工の委託、②行政や関係機関による支援や加工機械業者による指導、加工自体を委託する、③販路を確保後に販売量に応じて加工量を増加させることや自社規模に適した加工販売の展開方法を選択する、④生食用と加工用の販売方法に応じた自社内での調整やJAや周辺産地からの原材料の確保、⑤自社の他部門との調整や季節雇用の利用、⑥品質にこだわる消費者や地域内を市場として差別化を図る(栽培法による差別化、商品の高級化、ブランド構築)、⑦商談会やイベント等の活用や販促活動、生食用トマトの販路活用などの対応が取られている。

ビジネスモデルの3つの構成要素である顧客価値創造、利益創出方法、利益実現のプロセスは、それぞれWho-What-How(誰に、何を、どのように)という軸によって細分化されるが、事例における問題点と対応について、このビジネスモデルの構成要素で再整理し、その内容を検討すると、高い収益性をあげている事例では3つの構成要素について対応している項目が多く、特に顧客価値創造の項目が充実していることなどが認められた。

若年無業者支援における農業の導入実態と今後の展開

愛媛大学大学院・中本 英里

愛媛大学・胡 柏

本研究では、若年無業者支援における農の導入実態を明らかにし、今後の展開について考察することを目的とする。若年無業者は、内閣府によれば2013年現在で約60万人と推計されている。失業者とは異なり直接的な職業支援ではなく、医療・福祉等の分野における支援に重点が置かれている。2005年には厚生労働省により「地域若者サポートステーション（以下「サポステ」）事業」が創設され、職業意識の啓発や就業意欲の向上を目的とした対策が実施されている。進路決定者数は増加傾向にあり、2012年度の報告によれば43,785人の実績を上げている。しかし、再び離職し、再利用者となる者も少なくない。

農業活動も支援方法の一つであり、筆者が2013年に実施した全国160カ所のサポステを対象としたアンケート調査によれば、7割以上の施設で農が導入され、就労に必要な社会的スキルの習得や、直接的な就労手段の選択肢としての有効性が認められた。しかし、「現場スタッフの確保」、「農業サイドからのアプローチの少なさ」等の課題も複数挙げられた。

そこで、本研究では同アンケート調査の結果を基に、福祉的取組みにおいて重要とされる支援者側と農業サイドとの連携に焦点を当て、連携の利点と課題について考察する。関連項目についてクロス集計およびカイ自乗検定を行った結果、利点として、農家からの直接的な指導により、支援現場での作業内容が多様になること、就農への影響が高まること等が明らかになった。課題としては、サポステサイドからの連携依頼が圧倒的に多いこと、利用者がサポステスタッフ以外の他者と関わるといった点から、利用者の希望に配慮する必要があること等が示された。

具体的な取組を把握するため現地調査も実施した。調査対象地はSサポステである。20年以上前より若年者支援を実施してきたNPO法人により運営されている。農業関連事業は法人主導の下、従来の間接的な支援の一つとしてのみならず、六次産業化を見据えた直接的な就労手段としての確立も目指されている。2010年より新たに専任スタッフが採用され、2012年には1,104㎡の面積を有する自主農園が開設された。収穫物は法人が運営する直売所で販売されているほか、JAや青果市場への出荷、地域の小学校への寄贈も行っている。農業はあくまでも支援の1つであるが、「一步を踏み出したい若年無業者には参加に対する心理的抵抗感が少なく、コミュニケーションが自然な形で取りやすい」という点で有効とされ、利用者の人気も高い。専任スタッフの積極的な情報発信により、受入れ農家の増加やJAとの繋がりが実現し、地域の協力体制の整備により、多様な支援現場が確保された。これにより、「再利用者」問題の解決や、一般就労が限りなく難しい対象者の雇用の場の確保もできつつある。

第3会場

3-1	大学と連携した地域サポート人材の受入体制の構築と課題ー地域おこし協力隊事業を事例にしてー 高田晋史 他 (神戸大学)	3-10	行政発・育成型コミュニティ・ビジネス展開の課題と展望 小林康志(京都大学大学院)
3-2	木の駅プロジェクトの実態と課題 藤本千恵 他(神戸大学大学院)	3-11	地域ブランドにおける食文化資産を支えるアクターの育成に関する一考察 福山豊 他(熊本県立大学)
3-3	猿害対策の地域資源としての活用と可能性 布施未恵子 他(神戸大学)	3-12	地域の食文化の再現と展開に関する研究ー「高齢者の営農を支える『らくらく農法』の開発」プロジェクトを事例にー 片上敏喜(奈良女子大学)
3-4	能登半島における農具の所有・活用状況の定量的な分析と地域住民の意識についての考察 川邊咲子 他(金沢大学大学院)	3-13	中山間地域振興における地域特産物づくりとイベントの活用 亀山 宏 他(香川大学)
3-5	The Actual Condition of Environmental Management and Ecotourism Development in Indonesia - A Case Study of Kawah Putih, West Java - Dwinda Nafisah Nurinsiyah 他 (Graduate School of Mie University)	3-14	農業農村整備の投資と社会資本ストックの動向 國光洋二(農研機構農村工学研究所)
3-6	日本における農業簿記・会計思想史に関する考察ー大槻正男「自計式農家経済簿」ー 家串哲生(山形大学)	3-15	岐阜県における耕作放棄地の発生要因の計測ーパネル分析による接近ー 平児慎太郎(名城大学)
3-7	農業経営におけるCSR会計の構築に関する研究 大前ひとみ 他 (鳥取大学大学院)	3-16	子どもの孤食・共食とその規定要因 金子治平(神戸大学)
3-8	戦中・戦後における農家経済分析 - 「農業経営並農家経済調査集計カード」に基づく - 岸郁也 他(鳥取大学大学院)		
3-9	戦後東北地方における生活改善普及事業ー農林省の基本方針に対する青森県の対応ー 中間由紀子 他 (島根大学)		

大学と連携した地域サポート人材の受入体制の構築と課題

— 地域おこし協力隊事業を事例にして —

神戸大学・高田 晋史

神戸大学・布施未恵子

神戸大学・中塚 雅也

近年,わが国では域外から人材を過疎化・高齢化に直面する地域に投入し,地域振興を目指すいわゆる「地域サポート人材」導入政策が盛んに行われている。地域サポート人材とは,前述したような課題に直面する地域で様々な活動に参加し,地域振興をサポートする人材である。中でも,総務省が 2009 年から取組んでいる地域おこし協力隊事業は急速に普及している。他方,こうした地域では大学や大学教員が地域の地域づくりに取組む域学連携の取組みも推進されており,地域おこし協力隊事業と域学連携事業が結びつく事例が増えている。地域サポート人材や地域サポート人材導入政策に関する既存研究の中には,地域サポート人材の受入体制整備の重要性を指摘しているものは少なからずあるが,詳細な分析はされていない。これらの研究は,地域サポート人材が活動する受入地域の体制整備に着目しているものが多く,事業を円滑に進めていくための受入体制を考えるにあたっては,サポート人材,受入地域(地元住民),行政,中間支援組織(各主体の状況を見極めてマネジメントする組織)など受入れに関わる各主体の関係性を俯瞰的に見て分析する必要がある。

本研究では,域学連携の蓄積を活用し,大学と連携して地域おこし協力隊事業に取り組んでいる山梨県富士吉田市と茨城県常陸太田市で行った聞き取り調査の結果を基に,両地域における地域おこし協力隊の受入体制と各主体の関わりとその変化,受入体制整備と実践段階において大学と行政が果たす役割を明らかにする。また,各隊員の活動状況から取組みを円滑に進めていくために必要な隊員への支援体制についても考察する。

分析の結果,地域おこし協力隊事業に関わる各主体の連携をスムーズにするには,組織や職域を超えて各主体を繋ぐ人物の存在が重要であることが明らかとなった。また,大学と連携して行う場合,より地域に近い視点で隊員の活動をサポートする中間支援組織が大きな役割を果たしている。特に,制度設計や隊員の活動計画を作成・実践するにあたり隊員や行政の担当者が,現場に詳しい大学関係者(専門家)から知的支援を得ることが重要であり,そこで前述した中間支援組織が大きな役割を果たしている。さらに両地域における隊員の活動状況の分析から,活動の悩みや孤独感をケアする精神的支援を継続的に行うことが重要であり,これを現場の事情や活動内容をよく知る人物が担うことが望ましいと考えられる。この他,隊員が事業活動を行っていくためには,財政支援を継続して行う必要があり,こうした知的支援・精神的支援・財政的支援を継続的に行う受入体制を構築することが重要であると示唆された。

木の駅プロジェクトの実態と課題

神戸大学大学院・藤本千恵

大阪府立大学・浦出俊和

大阪府立大学・上甫木昭春

現在、木材価格の低迷により、林業経営の採算性は大幅に悪化している。そのため、林業生産が停滞し、間伐等の施業が十分に実施されず、放置されている森林が目立つようになり、環境保全問題の一つとなっている。これに対して近年、小規模山林所有者等が自ら間伐を行って出荷した間伐材を地域通貨で買い取り、チップ用材等としてチップ工場等へ売り渡す「木の駅プロジェクト」(以下、木の駅)と呼ばれる地域活動が、全国で広がりつつある。木の駅は小規模山林所有者の森林整備の促進や地域経済活性化、木材資源の有効活用などを目的としているが、その実態は必ずしも明らかにされていない。そこで本研究では、木の駅の活動を行う 23 地域の運営主体を対象に実施したアンケート調査結果(2013 年 10 月～11 月に実施、20 地域から回答)を用いて、木の駅の運営実態と課題を明らかにすることを目的とする。

平成 24 年度の木の駅の集材実績の地域別平均値は 297.2t であった。また、間伐材を出荷する出荷登録者数の地域別平均値は 41 人であり、この数値は、ほとんどの地域において、地域内の山林所有者総数のうちの 10%未満でしかない。つまり、現状では木の駅の集材量は少なく、各地域の中でも普及していない状況にあると言える。

木の駅の運営における課題として、「補助金に頼らない運営」と回答した地域が 19 地域中 7 地域と最も多く、財政的課題を抱えていることが推測された。そこで、各地域の木の駅の年間収支額を集材量 1t 当りに換算した上で、地域別平均値を算出し、それを用いて財政状況を概観した。補助金を除いた収入と支出の差額を見ると、全地域で赤字となっており、その平均額は -5547.2 円/t であった。つまり、木の駅は補助金がなければ成り立たず、財政的に不安定な活動であることが明らかとなった。

この赤字は、材の買取価格と販売価格の差額に起因している。材の買取価格は出荷登録者の出荷動機を高めるために、多くの地域で 6000 円/t と設定されており、地域別の平均買取価格は 5365.8 円/t である。これに対して材の地域別平均販売価格は 4249.1 円/t であり、平均買取価格を 1116.7 円/t も下回っていることが分かる。そこで、材の用途別の販売割合を見ると、材販売の主流は販売価格の低いチップ材用途であった。また、アンケートデータから算出した損益分岐点からは、仮に全量を販売価格の高い薪材として販売しても、集材量を増やすか、買取価格を引き下げないと黒字に転換しないことが明らかとなった。

木の駅は山林資源の保全に加えて、CO₂ 排出抑制効果や地域経済の活性化が期待され、中小規模の山林所有者の支援になっているなどの利点があるので、その持続性を高めることが喫緊の課題であると言える。そのためには、集材コストを低減させると同時に、山林所有者の参加を増やして集材量を増加させる一方で、薪材と同様に販売価格が高い需要を創造する取り組みを地域で行う必要がある。

猿害対策の地域資源としての活用と可能性

神戸大学・布施未恵子

神戸大学・中塚 雅也

近年、中山間地域などにおいて、野生鳥獣による農林水産業被害が深刻化・広域化しており、鳥獣被害対策にかかる予算は年々増加傾向にある（総務省，2014）。

鳥獣被害対策は個体数管理（捕獲）と被害防除にわかれ、防除はさらに誘因物の除去や追い払いをはじめとする、いわゆるソフト対策と、林縁整備や柵による防御といったハード対策に分かれる。イノシシやシカなどを対象とした場合は、集落と里山との境界に金網柵を設置するハード対策の効果が確認されているが、ニホンザルの防除の場合は、集落ぐるみの追い払いといわれるソフト対策とサル用電気柵に代表されるハード対策の双方を組み合わせる複合的におこなうことが求められる。

一方で、こうした対策は、その導入時の合意形成と、継続性が課題となり、地域住民の主体性の欠如、対策を担う人材不足、資金不足などを理由に、取組が開始されない、もしくは、開始しても中断されることが問題となっている。しかしながら、これまでの既往研究では、個々の対策手法に対する評価や対策実施のための要件については分析がなされてきたものの（本田，2007，山端，2011 など）、課題を抱える集落が、その課題を克服、改善し、継続的な実施に移行するための具体的な手法についてはほとんど研究されていない。

本研究では、こうした猿害対策を、地域にとって追加的な作業として捉えるのではなく、地域資源として取り込み、活用することより、対策の向上と持続性を確保するという視点にたって社会実験をおこなった。その上で、その取組が、地域社会の獣害への認識と対策に対する意向にあたえる影響を明らかにするとともに、今後の持続的な実践の可能性について考察をおこなうことを目的とした。

実践事例対象地としたのは、兵庫県篠山市畑地区である。2013年5月から大学と地域との協働で、サルの誘因食物となっている集落内の放棄柿をとるためのイベント事業を企画した。イベントは、11月に「さる×はた合戦」と称し実施され、のべ参加人数は132人であった。事業のフレームは、文献調査と予備調査により集落レベルでのニホンザル対策に必要とされる課題を明確にした上で、その課題に対応するように設計された。

参加者全員を対象としたアンケート調査、対象集落と事業担当の役員に対するヒアリングおよびアンケート調査を分析した結果、この取組が、住民の獣害対策に対する関心と考え方を変える契機となっていること、単発的であるが、不足する人材確保の機会となっていることなど、集落レベルでの対策展開を促進する具体的な手法の一つとなりうることが分かった。また、今後の課題として、外部からの参加を継続的に確保すること、そのためのターゲットを、総合的な地域づくりと関連づけて明確化することなどが考察された。

能登半島における農具の所有・活用状況の定量的な分析と 地域住民の意識についての考察

金沢大学大学院 川邊咲子
金沢大学 富吉満之
金沢大学 香坂 玲

【背景・課題】

戦後の高度成長期における急激な都市化や大衆化の中で失われつつあった農村文化は、近年、グリーンツーリズムや世界農業遺産の認定に見られるようにその価値が見直されてきている。しかし、保護政策や利用促進事業の対象となっているのは、多くの場合、建築物や景観などの観光資源や、希少価値が認められた伝統工芸・芸能であり、いわばそれらの周辺にあるような日常的な民具、特に農村文化に特有の農具などの道具類はほとんど注目されていない。多くの博物館・資料館では、消失への危機感から民具を蒐集するだけで、関係する知識・技術などの保護や活用に向けての環境を整えるまでに至っていない。

このような課題の解決に向けた社会科学的な研究は蓄積されておらず、現在の農村部において農具がどの程度残存しているかについても調査されていない。そこで本研究では、①現在の農具の所有・活用状況、②農具の保全・管理の主体についての住民の意識について明らかにすることを目的とする。さらに、現在も残っている農具に共通する特徴を分析し、現状に至った要因・背景を考察する。

【対象・方法】

石川県能登半島では、伝統的農業・漁業と文化の営みが評価され世界農業遺産(GIAHS)に登録され、農村文化の見直しが進んでいるが、農具に関する知識や技術の喪失は続いている。そこで、2013年8～11月に能登半島の教育委員会や資料館、個人宅を訪れて聞き取り調査を行い、また同年10月には能登半島4市5町の住民に対して農具の所有・活用状況についてのアンケート調査を行い、配布数7,068通の内、合計1,662通の回答を得た。

【結果・考察】

現地調査の結果から、農具について、以下の3つの捉え方ができると考える。

- ① “農具としての農具”：本来の農業用の道具として現在でも使用又は保管されている。
 - ② “文化資源としての農具”：農業体験活動や回想法などでの活用、インテリア化など。
 - ③ “資料としての農具”：博物館や資料館で資料として保存されている。
- ③については、資料館などが大量に収集・保存しているが、展示などで使われるものは限られており、また周辺知識や技術まで保存されている例はほとんど見られなかった。

アンケート調査では、元来使われていた農具の約半分が現在は元の持ち主の手から離れていることが明らかになった。また、60代が最も農具の所有率が高く、山あいの地域に農具が相対的に多く残っていることが確認できた。さらに、農具を保全・管理するべきと考える主体については、「博物館などの展示施設」と答えた割合が最も高かったが、性別、年齢、地域によって違いが見られた。主成分分析の結果、現在も使用されている農具は4つのグループに分類され、グループ内で共通する機能や構造などの特徴について推察した。以上を踏まえ、今でも農具が使用されている理由について考察する。

なお本研究は、環境研究総合推進費(1-1303)を受けて実施された研究成果の一部である。

The Actual Condition of Environmental Management and Ecotourism Development in Indonesia – A Case Study of Kawah Putih, West Java -

Graduate School of Bioresources, Mie University / Dwindi NafisahNurinsiyah
Padjadjaran University / Budhi Gunawan
Padjadjaran University / Teguh Husodo
Mie University / Tomohiro Uchiyama

Ecotourism is seen as a conservation tool in sustainable environmental management to avoid environmental degradation caused by overexploitation. It also has economic value for nature conservation that can provide economic income as conservation incentive and improve local community welfare by providing job opportunity. However, despite having a positive side as an economic activity that supports conservation, on the other hand, ecotourism also has challenges in its implementation. Ecotourism can be destructive impact on natural resources if it is not managed well. Thus the management of ecotourism should be tested its contribution to environmental management in order to preserve natural resources into sustainable ecotourism capital of the protected area.

In Indonesia, one of ecotourism destinations that need to be evaluated for its environmental management through ecotourism product is Kawah Putih (White Crater) located in West Java. Located in protected forest, Kawah Putih is fragile to environment destruction. But on the other hand, Perum Perhutani as state company that operated this area is struggling to protect this area with ecotourism concept. This study attempts to examine the contribution of ecotourism destination management by ecotourism operator on sustainable environmental management to avoid environmental degradation in Kawah Putih area.

A series of surveys was conducted by interviewing Perum Perhutani about ecotourism concept applied in Kawah Putih and local entrepreneurs that are involved in Kawah Putih tourism activities for knowing local participation in ecotourism activities. Questionnaire was also distributed to Kawah Putih visitors between March 30 and April 2, 2014, to measure visitors' awareness that was built through ecotourism activities in Kawah Putih.

As a result, the following has been revealed.

- 1) The operator are not only considering the protection of natural resources but also the involvement of local communities in the ecotourism development.
- 2) Substantial number of local businesses complaint that their income decreased, because since 2010, every travel tour arranged by the operator did not collaborate with them.
- 3) Although many tourist agree that conservation is important to protect biodiversity of Kawah Putih, not many of them are willing to participate on donation or volunteering.

日本における農業簿記・会計思想史に関する考察

－大槻正男「自計式農家経済簿」－

山形大学・家串哲生

昨今、「強い農業」の実現に向けて、農業簿記・会計に注目が集まっている。農業簿記・会計が、強い農業の実現に貢献できるのか否か、さらにはどのような役割を果たすことが出来るのか。これらが喫緊の問題となっているのである。

日本簿記学会・簿記実務研究部会においても、2010-2012年に、同問題に対する研究が取り生まれ、『地域振興のための簿記の役割－農業・地場産業を対象として－〈最終報告〉』（後に、戸田龍介編『農業発展に向けた簿記の役割－農業者モデル別分析と提言－』、中央経済社、2014として刊行）として纏められている。ここでは、「非効率性が指摘される日本の農業に対して、簿記は何らかの役割を果たせるのかどうか」といった問題意識の下、取組が行われている。「実はこれまでも、農業簿記という名称のもと、同様の問題意識に基づく研究や実践が行われてきており、その中には注目に値する研究や教育、また実践もあったのである。しかしそれにもかかわらず、従来の農業簿記は、日本の農業の発展・効率化に役立ってきたと言い切ることは難しいと思われる。それはなぜなのか。」といった課題に対し、制度、理論、教育、実務の観点からのアプローチを試みている。その結果、多数を占める小規模兼業農家に対して、「難しく特殊な記録形式である複式簿記が、暗黙裡のうちに農業簿記の基礎に据えられてしまったこと、このことが従来の農業簿記の理論的問題だ」と指摘している。

複式簿記は、明治初期に西洋より輸入され、大店を中心に一気に浸透していった。一方で、それ以前には日本には独自の簿記が発達していたことから、中小店には西洋式複式簿記はなかなか普及せず、和式簿記が昭和初期まで命脈を保った。農業においても明治期以降、西洋式簿記の摘要が試みられ、いくつかの農業簿記・会計書が発刊されている。そういった中で、1933年、大槻正男によって、複式簿記の簡便法として自計式農家経済簿が創案された。本個別報告では、大槻の会計思想に焦点を当てる。大槻はあえて農業経営への複式簿記の摘要にこだわらず、会計学を経済学の理論体系の一部門として捉え、独創的な理論を構築していった。当簿記は、単記式複計算簿記と称する単記式簿記を用いた農家経済簿であり、複式簿記と同等の自己監査機能を有している。当経済簿はなによりもまず農家が専門的な簿記知識を有しなくとも記帳ができることに軸足が置かれており、かつ複式簿記の原理に基づいて記帳の照合試算が可能になるように考案されている。

本個別報告では、先覚者のこれまでの研究成果を体系的に整理し、その会計思想を捉えることにより、農業簿記・会計の可能性や問題点を整理することを試みる。具体的には、大槻の会計思想の考察を行うことにより、自計式農家経済簿の現在と未来の可能性と課題を明らかにしたい。

大槻の自計式農家経済簿に関しては相当の研究蓄積が存在する。しかしそれらはその簿記様式に焦点を当てたものが大部分であり、簿記・会計理論の視点から行われたものは少ない。

農業経営における CSR 会計の構築に関する研究

鳥取大学大学院 大前ひとみ

鳥取大学 古塚秀夫

近年、企業の不祥事が相次いでいることから、社会では CSR（企業の社会的責任）への注目が高まっている。CSR の広がりに伴って、多くの一般企業が CSR 報告書を発行し、一部の企業が CSR 会計を報告している。また、農業においても食の安心・安全の観点から CSR 活動を行って、この活動を報告していく必要がある。しかし、農業経営において CSR 会計は未だに構築されていない。

そこで、本研究は農業経営における CSR 会計の構築を目的としている。この目的を達成するために、第 1 に、一般企業が報告している CSR 会計の特徴を明らかにする。第 2 に、農業経営における CSR 会計について生産履歴を利用して検討する。第 3 に、農業経営における CSR 会計について分析方法を検討する。なお、本研究では、一般企業の類型区分について付加価値分配型と収入支出対比型を付加価値型、CSR 関連コスト型と CSR 関連効果対比型および総合的 CSR 関連効果対比型をまとめて CSR 関連コスト型と呼ぶ。また、農業経営における CSR 会計を作成するうえで、「環境」への側面だけでなく、消費者にとって安心・安全を示す指標となる、農薬費・肥料費について生産履歴を利用する。

検討結果は以下のとおりである。第 1 に、一般企業における CSR 会計の特徴についてであるが、企業 505 社を対象に調査を行っている。その結果、505 社のうち 19 社 (3.8%) が CSR 会計も報告しているが、特徴として、付加価値型の報告が多いこと (14 社 (73.7%)) と、その付加価値型に記載されている金額は検証可能であることがある。この特徴のために、本研究では、農業経営における CSR 会計は付加価値型で構築する。第 2 に、農業経営における生産履歴を利用した CSR 会計についてである。鳥取市にある農事組合法人 Y 生産組合 (2012 年度と 2013 年度) を事例とする。生産履歴を利用することによって、環境負荷の軽減、食の安心・安全に努めていることを明確にすることができる。第 3 に、この CSR 会計の分析方法についてである。分析方法として、次の 2 つがある。すなわち、①地域貢献 (社会貢献) を分析するために地域還元額、地域還元率を使用することと、②同じ作物でも栽培方法が異なる場合に、環境負荷の軽減について比較検討すること、がある。事例である Y 生産組合について、①地域還元額、地域還元率を算出すると、前者は 2013 年度が 2012 年度に比べて、100 万円増加、後者は約 16% 上昇していることがわかる。②特別栽培米と普通米の 10a 当たり農薬費・肥料費を比較検討すると、前者の方が環境保全のために約 1,000 円費用を多く負担していることがわかる。さらに、作物や栽培地区ごとに農薬費・肥料費を示すことによって、将来の栽培計画を立てることが可能になる。

本研究では、農業経営において生産履歴を利用した付加価値型の CSR 会計を構築することができた。また、その CSR 会計について分析方法を提示することができた。

戦中・戦後における農家経済分析

—「農業経営並農家経済調査集計カード」に基づく—

鳥取大学大学院・岸 郁也
鳥取大学・古塚秀夫
京都大学・仙田徹志
京都大学・浅見淳之
鳥根大学・森 佳子

日本の農家経済調査は、簿記調査として1913年に帝国農会によって開始された。以来現在に至るまで、この調査は農家の記帳に基づいて毎年行われ、農家経済調査統計として刊行されている。簿記様式は単記式単計算簿記である。しかし、1942年～1948年の7年間は、京大式農家経済簿（単記式複計算簿記）に簿記様式が変わる。京大式農家経済簿は複計算簿記であるために、自己監査機能を有している。このために京大式農家経済簿を用いることによって、信頼性が高い農家経済の分析をすることができる。したがって、この期間の資料は、とくに価値が高いものとなっている。また、この期間において、日本では大きな改革が行われている。すなわち、農地改革と税制改革である。この2つの改革は、農家経済に大きく影響していると考えられる。しかし、京大式農家経済簿に基づいて集計された「農業経営並農家経済調査集計カード」を利用して、2つの改革の農家経済への影響について分析した研究成果はない。

そこで、本研究では、農地改革や税制改革によって農家経済がどのような影響をうけたかを明らかにする。研究対象と期間は、「農業経営並農家経済調査集計カード（期間：1942年～1948年）」に基づく山形県の5戸の農家経済である。研究方法としては、第1に、収入と支出の増減要因を分析する。第2に、資金循環を明らかにするために、資金循環分析を行う。第3に、自記式農家経済簿に関する既往の研究成果を踏まえて、動態的流動性分析を行う。第4に、貸借対照表を作成して、これに基づいて静態的流動性分析を行う。第5に、農家経済の成長を明らかにするために農家純財産（＝農家財産－農家負債）を指標として成長性分析を行う。主な分析結果は次のとおりである。第1に、収入と支出の増減要因である。収入の増加要因は粳米と上籾の販売収入であり、支出の増加要因は租税公課の支払いと固定資産（土地（農地）、大機具など）への投資である。第2に、資金循環と動態的・静態的流動性は悪くない。第3に、農家経済の成長性であるが、小作農家において、農家純財産が増加している。これは、上述した固定資産への投資である。

本研究では、次の2つを明らかにしている。すなわち、第1に、戦後、小作農家において、農地改革と農産物販売収入の増加が農家経済の純資産を増加させていること、第2に、1947年以降、税制改革が所得的支出の増加に影響していること、である。

戦後東北地方における生活改善普及事業

—農林省の基本方針に対する青森県の対応—

島根大学・中間由紀子

島根大学・内田和義

戦後、日本は GHQ の指示の下、農村の民主化を推し進めるために様々な施策を実施する。その主要な施策の一つが、生活改善普及事業（以下、生改事業）である。

生改事業に関しては、様々な分野からアプローチがなされている。しかしその多くは、事業の担い手である生活改善グループおよびその指導に当たった生活改良普及員の活動事例に関する研究である。これに対して市田知子は、生改事業の主管である農林省生活改善課の「生活改善に対する理念」について検討している（註 1）。

報告者は、市田の研究に触発され、新たな資料を用いて農林省の生改事業の基本方針を検討した。さらに、農林省の方針に対し自治体がどのように対応したのかについて中国地方の三県（鳥取、島根、山口）を事例に考察してきた。農林省の生改事業の目的は、農家生活の改善とともに農村を民主化することにあった。そのための受入組織として、自主的な生活改善グループの育成を行うことを方針とした。上意下達的な性格を持つ婦人会を利用してはならないとした。鳥取県は農林省の方針に忠実に従い、自主的なグループの育成を図った（註 2）。島根県は農家生活の改善を優先課題とした。効率性を重視し、婦人会を通してグループ育成を行った（註 3）。山口県は公式には自主的なグループの育成を掲げたが、実際には婦人会を利用した（註 4）。自治体によって対応が異なった要因として、農林省との人的交流の深淺、事業担当者の出自等を明らかにした。

本報告では、中国地方とは異なる農村社会を有する東北地方を対象に、農林省の方針に対する自治体の対応について考察する。さらに、そうした対応をとった要因についても追究する。東北地方のなかでも「他県に比し封建的慣習の残存が甚しく」、「農村の多くは民主的構成とははるかに遠い社会環境にあった」（註 5）青森県を取り上げる。生改事業を導入・遂行するに当たり、農村社会の性格がどのような影響を与えたのかについて検討する。

（註 1）市田知子「生活改善普及事業の理念と展開」『農業総合研究』第 49 巻第 2 号、1995 年。

（註 2）中間由紀子・内田和義・伊藤康宏「生活改善実行グループと婦人会—鳥取県を事例に一」『農村生活研究』第 52 巻第 1 号、2008 年。

（註 3）中間由紀子・内田和義「戦後改革期における生活改善普及事業と婦人会—島根県を事例に一」『農林業問題研究』第 45 巻第 1 号、2009 年。

（註 4）中間由紀子・内田和義「生活改善普及事業の理念と実態—山口県を事例に一」『農林業問題研究』第 46 巻第 1 号、2010 年。

（註 5）『青森県農地改革史』農地委員会青森県協議会、1952 年、2 頁。

行政発・育成型コミュニティ・ビジネス展開の課題と展望

－伊賀市菜の花プロジェクトを事例として－

京都大学大学院 小林康志

1. 研究課題と分析方法

コミュニティ・ビジネスは地域住民が事業主体となり、金銭授受を伴う活動を通じて地域課題を解決する事業である。また、行政、特に地方自治体においてもそれぞれの地域課題を有しており、コミュニティ・ビジネスを支援することでそれら地域課題の解決をしようとする施策が行われている。更に踏み込んで、行政がコミュニティ・ビジネスを創出し育成しようとする事例も見受けられる。この場合の事業形態や機能などは、行政の政策目標や行政支援のあり方により、地域住民の自発的参加で行われるコミュニティ・ビジネスとは異なることが想定される。

本報告では、「伊賀市菜の花プロジェクト（以下、「菜の花P」と略す）」を事例とし、行政が政策目標を持ってコミュニティ・ビジネスを創出し、育成しようとする場合に必要となる行政施策や行政関与のあり様を具体的に示し一般化することを課題とする。

分析方法は、まず①「菜の花P」（2007年開始）の特徴を、日本で最初（1998年）に開始した東近江市の菜の花プロジェクトと比較することで整理する。次いで、②行政のねらいもしくはアプローチの仕方がどのように事業参加主体に働きかけ、コミュニティ・ビジネス成立の可能性を高めたのかを明らかにする。そしてそれらの結果を踏まえて、③行政がコミュニティ・ビジネスを主導し育成しようとする場合に必要となる行政施策や行政関与のあり様を考察する。

2. 「菜の花P」における行政諸施策と行政関与のあり様

伊賀市のナタネ栽培面積は約61ha（2013年実績）であり、東近江市（15ha）と比較すると短期間で急拡大している。また、伊賀市では公募により多様な性格を有する約80の事業主体がナタネ栽培に取り組んでいるが、この中にはコミュニティ・ビジネスとしてナタネ栽培に取り組む事業主体だけではなく、地域の景観向上により生活の質を向上させようとするボランティア的な事業主体も含まれる。これらのことから、「プロジェクト」における行政施策は、生産活動的なコミュニティ・ビジネスを主目的としながらも、地域課題を抱える多様な事業主体に対し、地域課題に応じた柔軟な形態での参加を可能にしていることが明らかとなった。

また、「菜の花P」には、行政や搾油事業者、ナタネ栽培主体などの多様なステークホルダーが存在するため、利害関係の調整が必要となる。伊賀市における行政関与は、ステークホルダーで構成される協議会を設立し、事務局機能を担いながら協議会構成団体の間に互酬の関係を構築している。また、伊賀市の行政関与は協議会の事務局としてステークホルダーの利害関係を補助し、搾油事業者、ナタネ栽培主体の主体的な活動を促す間接的な関与であることが明らかとなった。

地域ブランドにおける食文化資産を構築するアクターへの 育成に関する一考察

—阿蘇地域における食文化を対象として—

熊本県立大学・福山 豊
熊本県立大学・中嶋 奈菜
熊本県立大学・北野 直子
熊本県立大学・松添 直隆

近年、我が国では、都市部への人口集中が高まる中で過疎・高齢化によって地方に残る景観や文化を継承する担い手が減少することが危惧されている。このような状況から、各地域では、観光による経済活性化ならびに交流によるその永続化、さらに再体験・再購入者のロイヤルティを高めることによる当該地域への定住化を狙いとした「地域ブランド」が立ち上げられ、運営が試みられている。しかし、各地域で地域ブランド展開が行われているため、近年では、各地域ブランド間の差別化の明確化とそのブランド価値の運営を適切に行わなければならない状況にある。

和田（2009）によれば、地域ブランドの価値構造として、基本的価値、便宜価値、感覚価値、観念価値によって構築され、特に地域ブランドの差別化を行うためには、感覚価値と観念価値が重要であると指摘している。さらに、これらの価値構造を構築するためには、経済インフラ資産、生活資産、歴史文化資産、食文化資産、コミュニティ資産といった地域が持つ資産を精神的価値へ昇華することが必要であるとし、これらの資産（以下、地域ブランド資産）から検討された地域ブランドを維持するために、「アクター」としての担い手を育成・誘引する重要性を述べている。

これまでの地域ブランドに関する研究は、斉藤（2010）に代表されるように、消費者へのコミュニケーション展開、企業参入等による供給体制の展開、地域ブランド管理、認証システムについての研究が多い。しかし、地域ブランドの価値を支える担い手を維持するため、価値の伝承や担い手の育成を検討した研究は少ない。

そこで、本研究では、地域ブランド資産を支える地域住民の資産価値の伝承過程を明らかにし、地域ブランドを支えるアクターの育成方法について検討する。なお、本研究では、全国における地域ブランドの多くが農産物またはその加工品が中心的な商品となっていることから、地域ブランド資産において特に食文化資産を中心に分析を行う。

分析対象として、熊本県阿蘇地域における高校生とその保護者を対象とする。同地域は、熊本県において農耕祭事等の歴史文化や様々な行事料理や伝統料理といった食文化が存在する地域である。分析では、まず、対象者の阿蘇地域での郷土料理の認知・経験の有無、喫食状況、学習状況を把握する。続いて、郷土料理についての認知・想起状況や喫食頻度等の高低から対象者または郷土料理を分類し、各類型の喫食状況や学習状況の違いから伝承過程を明らかにし、アクターの育成方法について検討する。

地域の食文化の再現と展開に関する研究

－「高齢者の営農を支える『らくらく農法』の開発」

プロジェクトを事例に－

奈良女子大学 片上敏喜

1. はじめに

近年、「地域づくり」や「まちづくり」と呼ばれる多様な地域の関係者がかかわる地域活性化のアプローチが隆盛している。従来、このような取組みは各地で進められてきたが、その内実は国の制度や主導の下に、地方自治体や商工会などの組織が主体として進めるケースが多かった。そのような中、地方分権の進行に伴い、地域を主体とした地域づくりやまちづくり、あるいは地域振興といった動きが推進されるケースが多くみられるようになってきている。こうした動向の中で、従来の寺社仏閣や史跡名勝等、これまでに捉えられてきた地域資源とは異なる「食」や「生活・暮らし」に目を向けた取組みが注目されている。

しかしながら、そのような地域の食文化を用いた動きにはいまだ不明な点が多い。それは地域の「食」や「生活・暮らし」といったものは、身近な生活環境の中に織り込まれているため、地域の資源として捉えにくい傾向があるためである。ゆえに、新たに地域の資源として捉え直していく「発掘」や「再評価」のプロセスを経ることが重要となってくる。そして、そこではどのような人々が、いかなるプロセスを経て、どのように地域の食文化を用いたアプローチを選択していくのかといった具体的なアクションが「発掘」や「再評価」に影響を及ぼすといえる。さらに、それらのアクションを可能にする人々のモチベーションや条件・背景等も、「発掘」や「再評価」のプロセスに至るまでの重要な要素として指摘することができる。

2. 研究アプローチ

そこで本発表では、社会学・農学・工学・スポーツ科学といった複数の学問分野にまたがり、研究者、地域住民、自治会、企業、自治体などの多様な主体が関わり、中山間地域の新たな社会デザインの創出を目的とした「高齢者の営農をささえる『らくらく農法』の開発」プロジェクトにおいて行われた地域の食文化の調査・再現と展開の過程を事例として考察を行う。

具体的には、同プロジェクトの対象地である奈良県吉野郡下市町内において行われた地域の食文化に関する聞き取り調査から得られたデータをもとに再現された食品が、同プロジェクトに関係する様々な人々のヤリトリによって、新たなアイデアが付与され、新しい地域の特産品（＝食文化）として展開されるに至るまでの過程に焦点をあてる。そしてそれらを創出した背景、要素等を明らかにした上で、地域の食文化を再現し、展開していく意義について新たな知見を示していく。

中山間地域振興における地域特産物づくりとイベントの活用

香川大学・亀山宏
香川県農政水産部・柴田裕子

I 背景

小田切[1]は、地域資源をベースとする内発的な農村再生における人材支援の重要性を指摘している。渋谷[2]は、地域資源概念との比較に基づいて生活文化キャピタルを定義し、地域の豊かさの特徴に論究している。徳野[3]は、「T字型集落点検」として「近接別居」により、集落外居住者からの支援に将来の集落の行き末を再考することをすすめている。

II 課題と方法

香川県の中山間地域では、地域農産物の特産品による振興策が取り組まれてきた。さぬき市南川地区では、地域に自生した自然薯を転作作物として栽培をはじめ、平成元年に自然薯研究会を結成し、21年には23名で転作田2haで産地を形成した。産地直売を基本として販売促進のために12年から自然薯祭りを開催している。合併後のさぬき市では海の牡蠣、ワイン、桑の葉を利用した菓子、卵などの特産品や商品開発を支援している。

本稿では、中山間地域の振興策（生活インフラと鳥獣害対策、特産品づくり）についての現状と課題について聴き取り、自然薯祭りへの来訪者に実施した意向調査結果を検討した。2011年12月開催の「じねんじょまつり」への来訪者に、①居住地、②目的、③全体の評価ほかについて意向調査を実施し、基礎的な分析と共に順序プロビット分析を行った。

III 対象事例の概要と分析結果

自然薯祭り、自然薯の価格、自然の家、みろく産直、自然薯粉末、南川に対するそれぞれの満足度、来訪の目的、滞在時間に関して、来訪者の居住地別には特に注目する点はないものの参加回数では差がみられた。

IV 考察

来訪者は地元からが多いが、高松市から(25%)の参加者もリピーターになっている。ただ、3回目になると良いと普通との回答の分かれ目となっている。

「じねんじょまつり」では自然薯研究会の取組みとして、特産物の販売だけが取り上げられるものの、いのしし鍋などの婦人会の活動や、地元製作品の販売などの活動への取り組みも模索されている。

人口の減少が進み消滅が懸念される中、「近接別居」への期待がますます高まっており、地域の振興策の観点からイベントの開催のあり方への再考が求められている。

[引用文献]

[1] 小田切徳美編著『農山村再生に挑む』、岩波書店、2013。

[2] 渋谷美紀著「生活文化キャピタルの再構築にみる豊かさの諸相」『農林業問題研究』第44巻、第4号(2009)、pp.20-31。

[3] 徳野貞雄著「人が輝けばムラは輝く」『農村の幸せ、都会の幸せ』、日本放送出版会、2007、

農業農村整備の投資と社会資本ストックの動向

農業・食品産業技術総合研究機構・國光洋二

2001 年以降の公共事業費の削減を受けて新設される施設が減少し、社会資本の老朽化がすすんでいる。老朽化の程度は、事業予算の削減割合が他の公共事業より大きい農業農村整備関係の社会資本でより深刻だと考えられる。農林水産省の公表資料によれば、全国の基幹水利施設（末端受益面積が 500ha 以上の比較的大規模な農業水利施設）のうち、標準耐用年数を超過している施設の割合（延長及びカ所数の割合）が経時的に増加し、2012 年時点で 45 %を超えている。ただし、具体的に調査されているのは、基幹水利施設のみで、農地整備に関する施設のような基幹水利施設以外の農業基盤施設の状況や地域的な動向は不明である。少ない予算を効率的・計画的に使用するという目的からすれば、農地整備を含む農業農村整備の全事業種について賦存状況をモニタリングすることが重要である。

そこで本稿では、農業農村整備のうち、圃場整備や畑地帯総合整備で蓄積されてきた農地整備資本ストックを中心に、事業の種類毎にストックの動向を把握・予測する手法を提示した。その手法を適用した結果をもとに、現在の資本ストック水準を維持するために必要となる投資額を都道府県毎に推定し、今後の政策において考慮すべき事項を考察した。本稿で提示する手法の特徴としては、①社会資本の実態に即したワイブル分布除却モデルを用いること、②ストマネ施策による施設の長寿命化を考慮すること、そして③農地整備資本ストックの都道府県別の動向を予測することである。

分析結果から、大きく以下の 4 点が明らかとなった。第 1 に、ワイブル分布による除却関数の方が、サドンデスの仮定の場合よりも、資本ストックの水準、必要投資額ともになめらかに推移する結果を得た。現実の状況は、比較的新しい施設でも事故等により破損する一方で、標準耐用年数以上に使用可能な施設も存在するので、ワイブル分布の仮定で想定した除却状況に近いと考えられる。第 2 に、農業農村整備全体に占める農地整備資本（田整備と畑整備）の割合が最も大きく、他の事業種以上に資本ストックの維持が困難なことが明らかとなった。このことは、農地整備施設の更新においてストマネ施策により農地基盤以外の施設の更新整備に特化したとしても回避できそうにない。第 3 に、将来の必要投資額が年度毎に大きく変動し、波状的かつ逡減しながら変動が繰り返されること、ストマネ施策による施設の長寿命化により、ピークの後ろ倒しができるとともに、平均的には必要投資額の節減が可能となること、その反面、ピークの必要投資額は、ストマネ施策による長寿命化を行ったとしても、長寿命化を行わない場合と大きく異なることが分かった。第 4 に、田整備に関する都道府県別の必要投資額の推計結果から、必要投資額のピークが生じる時期が都道府県毎に異なること、同一の都道府県でも必要投資額のピークとボトムに差があること、特に早くから 30a 区画での整備が開始された県のピークとボトムの差が大きいことが明らかとなった。

これらの結果から、将来の農業農村整備に関する公共投資の政策について、いくつかのインプリケーションを議論して結論にかえる。

岐阜県における耕作放棄地の発生要因の計測

—パネル分析による接近—

名城大学・平児慎太郎

本報告は、岐阜県における耕作放棄地の発生要因を解明し、その発生要因の差異を特定する。

仙田（1998）は農業センサスの個票データをもとにロジットモデルを適用し、個別農家レベルでの耕作放棄の意思決定を農家に内在する要因と農家を取り巻く地域環境要因から特定した。これに対し、吉田他（2004）は中国地方の全市町村を対象にクラスター分析と重回帰分析を組み合わせ、地域属性の違いが耕作放棄地に及ぼす影響、その発現の態様を明らかにした。さらに、高山他（2011）は農業集落カードを用い、中国地方の農業集落を対象にパネル分析を行い、集落レベルでの耕作放棄地の発生要因を解明した。本報告では岐阜県を岐阜地域、西濃地域、中濃地域、東濃地域、飛騨地域に分割して扱う。いずれの地域にも地域類型でいう都市的地域、平地農業地域、中間農業地域、山間農業地域が混在することになるが、本報告の狙いからすれば、地域区分そのものによる発生要因の差異よりも、一つの連続的な地域として捉え、その固有性に留意しつつ耕作放棄地の発生要因に着目した。そこで、本報告は、これらの先行研究に依拠しつつ、[被説明変数] y :耕作放棄地率、[説明変数] x_1 :総農家数、 x_2 :兼業農家率、 x_3 :規模 2ha 以上率、 x_4 :農家人口 65 歳以上率、 x_5 :担い手率、 x_6 :自給的農家率、 x_7 :水田率、 x_8 :借入耕地率、 x_9 :貸付耕地率、 x_{10} :農作業委託農家数、 x_{11} :農作業受託農家数、を変数として採用し、パネル分析を適用した。

分析の結果、(1)自給農家率は、岐阜県全域で共通する事項として、自給農家率が有意に正であること、(2)それ以外の農家属性に関する変数は地域により違いが見られたが、特筆すべきこととして、岐阜地域、西濃地域では高齢者の存在が耕作放棄地率の増加を抑止する一助となり得る効果が示唆されること、(3)農地の流動化が活発な農業集落ほど耕作放棄地率の増加が抑止されることが予想されたが、地域により多様であること、(4)貸付耕地率、農作業委託農家数、農作業受託農家数が高い農業集落ほど耕作放棄地率の増加を抑止すること、(5)その反面、西濃地方に限り、借入耕地率が高い農業集落ほど耕作放棄地率の増加が高まる結果となり、農家が積極的に耕地を借り受けても、耕作放棄地率の増加するペースに追いついていない可能性があること、が示唆された。

参考文献

- 仙田徹志（1998）「耕作放棄地の発生要因に関する計量分析」『農業経営研究』36（1）、57-62。
高山太輔・中谷朋昭（2011）「農業集落における耕作放棄地の発生要因に関する計量分析」『2011年度日本農業経済学会論文集』、95-102。
吉田晋一・佐藤豊信・駄田井久（2004）「中国地方を対象とした耕作放棄の要因分析」『農村計画論文集』6、277-282。

子どもの孤食・共食とその規定要因

—2006年社会生活基本調査の匿名データを利用して—

神戸大学・金子治平

1980年代から孤食（あるいは個食）が社会的に問題視されるようになり、2012年の第2次食育推進基本計画では、国民の「朝食または夕食を家族と一緒に食べる『共食』の回数」を、2010年の週9回から2015年には週10回以上とする目標値が定められた。この「共食」は、とくに子どもにとっては、家族団らん、バランスのよい食事摂取の習慣形成にとって重要であり、食育の面からも重要であると考えられる。

ところで、少なからぬ子どもたちが、塾や習い事通いや部活動等によって夜遅く帰宅するため（あるいは学校から帰宅後、早くに食事をして塾や習い事に行くため）、母親等の家族が食事している側にいたとしても、家族の食事時間とはズレが生じていることが多いと推測される。その場合、共食を字句どおりに、家族も一緒に食事をすると解釈した場合には、共食の割合が低くなってしまう。しかし、共食を家族のいるところで食べる」と解釈した場合には、共食の割合は高くなる。家族団らん、食事摂取の習慣形成という側面からみた場合には、字句通りの共食ではなく、家族のいるところで食べる場合も、共食に含めてもよいのではないだろうか。

本報告では、総務省統計局による2006年「社会生活基本調査」の匿名データを集計することにより、家族と一緒に食事をした子ども、家族がいるところで食事をした子ども、一人で食事をした子ども、などに区分することにより、実態を把握するとともに、その規定要因を世帯類型や家族の就業状態等により明らかにすることを試みる。「社会生活基本調査」は連続する48時間（2日間）にわたって、15分単位でもっとも長い行動の種類（睡眠、身の回りの用事、食事、通勤・通学、等々）を記録したものであり、15分間でもっとも長い行動でなければ記録がない、また、場所に関する記録がないという制限もある。そのため、他の調査と比較すると、「欠食」（食事の記録がない）割合が高くなる。しかし他方では1996年調査からは家族、学校・職場の人、その他の人と一緒にいたかどうかとも記録されているため、孤食や共食の実態把握には適しており、回答者によって実態とは異なる回答が行われる普段の状態ではなく、アクチュアルな状態を把握可能である。なお、集計の対象は、土・日曜日を含めると小・中・高校生延べ約2万7千人・日である。

第4会場

4-1	単位 J A によるエコフィールド製造事業の経済的存立条件 朝倉裕貴(農業開発研修センター)	4-10	香港における栃木産米の購買選択行動と市場可能性 中村哲也 他(共栄大学)
4-2	未利用資源である広葉樹による木質バイオマス発電用燃料の供給可能性に関する研究 福田雄治 他(高知大学大学院)	4-11	食肉公社における輸出事業の現状と課題に関する一考察 石塚哉史 他(弘前大学)
4-3	在来作物の種子保全をめぐる社会的考察 鶴田 格 他(近畿大学)	4-12	Globalization of Malaysian Food and Japanese Acceptance -A Case Study of Japanese Acceptance in Tokyo and Ipoh City, Malaysia- Nabila binti Mohd Saidi 他 (Graduate School of Shinshu University)
4-4	台湾における作物在来品種の保全体制に関する一考察 富吉満之(金沢大学)	4-13	食用油脂企業の中国国内販売戦略ー江蘇省 F C 社の事例ー 金子あき子 他 (桃山学院大学大学院)
4-5	在来品種の顕在化プロセスと展開課題 山口創 他(神戸大学)	4-14	産地サイドからみた中食企業におけるバイヤー機能の分化ー集中調理施設の有無とチェーン規模に着目して 齋藤文信 他(秋田県農業試験場)
4-6	農山村地域に適した SNS の活用範囲に関する研究ーFacebook ページと Facebook グループ間の利用傾向の比較分析ー 鬼塚健一郎(京都大学)	4-15	京都府中丹地域の消費者動向における地域差 河村能夫 (龍谷大学・京都府立農業大学校)
4-7	1980 年代南東アラスカ・先住民企業の木材生産と持続可能な森林管理 奥田郁夫(名古屋市立大学)		

単位 JA によるエコフィード製造事業の経済的存立条件

農業開発研修センター・朝倉裕貴

近年、飼料価格が高騰し、畜産経営は苦しい状況にあり、飼料費削減が緊急課題となっている。飼料費削減の取り組みの一つとして、食品残さ等を再利用・加工した飼料（エコフィード）が注目されている。エコフィードの給餌は、畜産経営における飼料費の削減だけでなく、エコフィードの品質や畜種により、肉質の向上や飼養期間の短縮効果もみられる。またエコフィードの原料となる食品残さ等は、食品製造業をはじめとする食品関連産業から大量発生し、食品リサイクルの観点からもエコフィードへの再生利用の期待が高まっている。

エコフィードに関する先行研究において、エコフィードの原料調達から飼料化までの製造過程や需給構造の分析を行った研究は多いものの、製造事業の収支分析を行った研究はほとんど見られない。また単位 JA が主体となったエコフィードの製造・供給に関わった先行研究もほとんど見られない。

愛知県東部に位置し A 市一円を管内とする B 農協では、管内の中小規模の養豚農家 3 戸向けに、発酵リキッドタイプのエコフィードの製造・供給を行っている。本報告では、この B 農協が行うエコフィード製造事業を事例として取り上げ、2014 年 4 月から 5 月にかけて B 農協に対して行った聞き取り調査をもとに、地域内におけるエコフィードの生産・流通システムおよび JA 製造事業の収支構造を明らかにするとともに、エコフィード利用畜産経営の経営改善効果を明らかにする。

未利用資源である広葉樹による木質バイオマス

発電用燃料の供給可能性に関する研究

高知大学大学院 福田雄治

高知大学教育研究部総合科学系黒潮圏科学部門 飯國芳明

【課題】この研究の課題は、高知県において建設が進められている2基の木質バイオマス専焼発電プラント（以下、発電プラント）の燃料が県内の未利用資源である広葉樹によって賄えるかどうかを検討することにある。

高知県では豊富ではあるが利用が低迷する森林資源の利用拡大を目的として、国の再生可能エネルギーの固定価格買取制度の活用を前提に2基の木質バイオマス専焼発電プラントの整備が進められている。これら施設では、その設計段階において主たる木質バイオマスをスギ、ヒノキといった針葉樹に求めてきた。しかし、針葉樹は建築用材や製紙原料としての用途と競合するため、新たな施設の需要を十分に賄う供給量が確保できない可能性が高まっている。

そこで、本研究では木質バイオマスを県内の広葉樹林に求めて、その実行可能性の検討を行うこととした。県内の広葉樹は私有林面積の約34%を占め、その資源量は針葉樹に劣らない水準にある。

【分析方法】分析は、まず、1)木質バイオマスとして利用する際に関連する上流市場を整理した上で、2) 県内2基の発電プラントの需要曲線を国の固定価格買取制度の価格決定の参考資料に基づいて推定する。次に、3) 既存の木材チップ市場の供給曲線を、二段階最小二乗法を用いて推定し、4)木材チップ市場の均衡点を推計して、県内の広葉樹が2基の発電プラントの木材需要を満たす供給量が確保できるかどうかを検討する。

【分析結果】分析結果を手順にそってまとめると次のようになる。1)発電用のチップ市場は建築用材や製紙原料用のチップなどが密接に関連する市場である。2)発電プラントは、2基の発電プラントの損益分岐価格となる木質チップ価格22,731円/BDt未満であれば稼働でき、その需要量は約130.5千BDtになる。3)高知県における木材チップ市場の供給曲線は木質チップの実質価格、数量、乾しいたけの輸入量をそれぞれ p 、 q 、 im とすると(1)式で示すことができる。

$$\ln(q) = 4.66 * \ln(p) - 0.30 * \ln(im) - 44.13 \dots (1)$$

4)市場の均衡点から、2基の発電プラントの稼働に損益分岐価格未満の水準で十分な木材チップが供給できることが判明した。

在来作物の種子保全をめぐる社会学的考察

—大和高原の雑穀栽培を事例に—

近畿大学・鶴田 格

近畿大学大学院・藤原佑哉

アワ、キビ、モロコシなどの雑穀は日本で古くから栽培され、とくに山間部で重要な食料源となってきた。しかし雑穀栽培は明治期以降衰退の一途をたどり、戦後はほとんど生産されなくなり各地で消滅していった。近年の雑穀ブームなどにより需要が増え、岩手県など一部では商業栽培がおこなわれているが、一般には従来型の自給的雑穀栽培はほとんど消滅しているといつてよい。奈良県の大和高原地域でも戦後のコメ生産の進展により雑穀栽培はほとんど姿を消したが、現在でもごく一部の地域でモロコシ、アワ、キビが細々と栽培されている。本報告では、この大和高原の奈良市旧都祁村 O 地区と隣接する山添村 M 地区のふたつの地域における雑穀栽培の事例をもとに、他地域ではほとんど消滅してしまっただ雑穀栽培が、これらの地域で現在に至るまで存続してきたその背景について、社会学的な視点から考察する。

O 地区においては、戦中までは主食の一角を担っていたと思われるモロコシが、現在では赤飯の着色用にのみ栽培されている。穀粒の皮に含まれる色素を利用して、小豆を使った通常の赤飯よりも鮮やかな赤色に染めることができるのである。モロコシを使った赤飯は、結婚式、誕生日、棟上げ式などさまざまな祝い事における引き出物として作られ、香りもよいことから好まれている。しかし O 地区におけるモロコシ生産は、単なる自家消費向けにとどまっているのではない。地区内には農家主婦を中心とする農産物加工所兼直売所があり、そこが赤飯生産の拠点となっており、また加工所のメンバーを中心にモロコシが多く栽培される傾向がある。地区内外から祝い事に大量の赤飯の注文が入ることも多く、加工所で働くことは高齢女性に対してある種の生きがいを提供している。

O 地区に隣接する M 地区においては、こうした着色用のモロコシ栽培は行われていないが、村の神社における神事（新嘗祭）の奉納用に以前からアワとキビが栽培されている。M 地区では村人 1 名（現在では負担軽減のため 2 名）が 1 年交代で「堂下（神社の世話役）」をつとめる慣行がある。アワとキビは戦前までは主食穀物のひとつとして多くの世帯によって栽培されていたと思われるが、現在では奉納を目的に堂下によって毎年持ち回りで栽培されているのみである。

上記二つの事例を比較すると、O 地区の事例は（祝い事の食事に関する）社会慣習あるいは嗜好性が背景にあり、M 地区の事例は信仰と関わるというふうに、一見するとそれぞれ異なる理由によって雑穀種子が例外的に保全されてきたようにみえる。しかしその背景には、村落共同体の一員としてのあるべき規範（「祝い事の食事はこうあるべき」「堂下としての責任を果たすべき」）に起因する同種の社会的な力学が働いていると考えられる。

台湾における作物在来品種の保全体制に関する一考察 —関連組織へのヒアリング調査から—

金沢大学・富吉 満之

1. 背景と課題

作物遺伝資源を構成する在来品種（伝統品種・地方品種）は、改良品種（近代品種）の普及、多国籍企業や大企業による種子産業の寡占・独占が進む中で、世界的に急速に消失している。これらの在来品種を持続可能な形で保全・利用することは、農業における生物多様性の保全や「食料への権利」論の観点からも、国際的に喫緊の課題となっている。ヨーロッパでは有機農業者やホビーファーマーによって、多くの在来品種が圃場 (on farm) で保全・利用されているが、品種が誕生した場所とは別の地域で栽培されている場合が多い特徴を持つ。アフリカ等の開発途上国においては、参加型開発の観点から、農民参加型育種についての調査が行われている。他方、日本における在来品種は特定地域の農家によって継続的に小規模に栽培されてきた（大和田・川手 2009）。日本を含めた東アジアの農業の特徴としては、豊かな気象・風土条件による(1)高い生産性と(2)規模の零細性が特徴である。在来品種の保全・利用に関しても、東アジアの農業形態に沿った管理システムが想定される。

東アジアに含まれる台湾においても、在来品種の保全・利用の中心的な役割を担ってきた零細農家は、高齢化等により減少しており、多様な主体が関わることによる管理システムの構築が課題となっている。本研究では、日本と同様に島国である台湾を取り上げ、関連組織への調査を通じて、台湾における在来品種の保全体制の特徴を明らかにする。

2. 対象と方法

調査団体は、台湾国内の5機関・団体とした。具体的には、①國家作物種原中心（政府機関）、②新社農薬種子行（種苗会社）、③合樸農學市集（市民団体）、④台湾大学農芸学系（研究機関）、⑤世界蔬菜中心（国際機関）である。2014年5月に各機関を訪問し、運営体制および種苗の管理状況に関する取り組みについてのヒアリングを実施した。

3. 結果及び考察

台湾では、韓国とは異なり、バイオメジャーによる国内の大手種苗会社の買収は行われていない状況にあった。また、日本各地でNPOによる活動が進んでいる状況と比較すると、台湾では農家やNPOによる保全活動は導入期にあると考えられる。政府は参加型育種といった取り組みに対しては消極的であるため、研究者や農民が中心となって活動を進める必要性が示唆された。更に、そのような活動においては、大学研究者が指導的・中心的な役割を果たしていることが明らかにされた。

[引用文献]

大和田興・川手督也 (2009) : 「農民主体の作物遺伝資源管理の今日的意義」, 『農業経済研究』, 別冊 2009 年度日本農業経済学会論文集, pp.338-345.

在来品種の顕在化プロセスと展開課題

神戸大学・山口 創

神戸大学・中塚雅也

背景と目的

農作物における在来品種とは、地域で伝統的に栽培・自家採種が繰り返され、特有の形質を獲得した品種であり、全国各地に存在している。こうした品種のうち一部は、「京の伝統野菜」、「加賀野菜」などの地域ブランドを構成する品種として、産地が形成されている例も見られるものの、品質や収穫期が安定せず生産が難しいなどの理由から、多くは高度経済成長期以降、現在主流となっているF1品種等に置き換えられていき、各地で消滅の危機に瀕している。一方で、このように生産には不利な特徴を有するにも関わらず、地域の気候風土や食文化と結びつき、固有性が高いことを強みとして、近年、伝統食等と組み合わせられ地域づくりに活用されたり、特産農作物として普及されたりする事例も見られる。

これらからもわかるように、各地に存在する在来品種が地域資源として活用される可能性は十分にあるといえる。そのためには、まずは各地に潜在的に存在する在来品種を顕在化させていくことが必要である。先行研究では、在来品種の保全を目指した民間組織の取組みについて調査した富吉他（2012）、地産池消の現状について報告した足利他（2007）などがあるものの、在来品種を活用するための前段階として、その顕在化に着目した研究はない。在来品種は、地域内でさえ認知度が低く、地域資源として捉えられていないものも多いと考えられるため、顕在化に至るプロセスの解明は、今後、在来品種の消滅を防ぎ、活用をすすめる仕組を構築する上で重要性は高いと考える。そこで本研究では、在来品種がどのような経緯を通して、地域で顕在化していったのか、そのプロセスを明らかにすることを目的とした。

研究の方法

調査では、兵庫県内で生産・販売が行われている在来品種のうち5品種を対象とし、地域資源として取り上げられるまでの経緯や、その後の活動展開について調査した。調査期間は2014年7月から8月にかけてであり、生産者コミュニティの代表者や生産者個人に対する聞き取りにておこなった。分析では、事例ごとに在来品種が地域資源として取り上げられるまでのプロセスを時系列的に整理し、比較した。

結果と考察

分析の結果、第一に、在来品種が取り上げられる経緯としては、在来品種生産者以外の視点がきっかけとなる場合が多いこと、第二に、活動の展開自体は、在来品種生産者が主体的な役割を果たす場合と、地域外住民やUターン者といった生産者以外が主体的な役割を果たす場合の2つの展開があることが明らかになった。そして、以上の結果を整理し、在来品種の活用をすすめる上での課題を示すことができた。

農山村地域に適した SNS の活用範囲に関する研究 —Facebook ページと Facebook グループ間の利用傾向の比較分析—

鬼塚 健一郎（京都大学）

1. 背景と目的

農山村地域では、地域を取り巻く生産環境、生活環境、自然環境の維持・管理に、地域コミュニティが大きな役割を果たしてきた。ところが、長年にわたる過疎化・高齢化により、地域コミュニティが脆弱化し、担ってきた役割を果たせなくなる地域が増加している。ところで、近年は SNS に代表されるインターネット上のコミュニケーションツールが広く普及しており、時間的・空間的な距離を克服した交流が可能となっている。このような SNS の特性を活かして地域コミュニティの再生に結び付けようという動きも活発化しており、2005 年頃より、参加者を特定の地域内の住民に限定することで、地域内の交流を活発化させ、コミュニティの強化につなげることを目的とした地域 SNS 等の取組が全国的に広がってきた。ところで、特定の地域で SNS を活用する場合、最適な活用範囲を設定する必要があると考えられるが、SNS 活用における活用範囲に着目した研究はみられない。

筆者らは、京都府下 3 つの農山村地域を対象として SNS を活用した地域コミュニティの活性化を目指したプロジェクト（SCOPE プロジェクト）を 2011 年 12 月から 2013 年 3 月まで実施した。このプロジェクトにおいて、①地域内外のあらゆる人との交流（Facebook ページ）、②地域内（集落・旧村範囲）住民のみでの交流（Facebook グループ）の 2 種類の範囲で交流場所を設定した。本研究では、同 3 地域における 2011 年 12 月から 2014 年 7 月までの約 32 か月間の Facebook ページと Facebook グループの活用状況に着目して、農山村地域に適した SNS の活用範囲を明らかにすることを目的とする。

2. 分析と結果

まず、対象期間内における Facebook 上の投稿数を地域別・個人別に集計した。その結果、2 地域において、Facebook ページでは継続的で活発な活用が認められたのに対して、Facebook グループについては徐々に利用が低迷する傾向が確認された。また、残りの 1 地域については、Facebook ページ、Facebook グループの両方とも利用が停滞していた。個人別でも、投稿が活発だった住民も徐々にグループを使わなくなる傾向がみとれた。低迷の要因を探るために、各地域における活発な投稿者計 18 名に対してヒアリング調査とアンケート調査を実施した結果、①Facebook グループは、必要性は十分に認知されており、利用意向も低いわけではないこと、②集落・旧村のような小範囲では、有線放送や回覧板など、様々な情報共有手段があり、必要性があれば顔を合わせることも容易であるため、交流という目的のみでは他の人を呼び込みにくく、SNS 独自の強い必要性を示さなければ利用がしにくいこと、等がわかった。さらに、地域それぞれに特有の事情、例えばあまり利用者を広げたくない、一部の住民とは共同で利用したくないといった事情なども要因としてあることがわかった。

3. 考察

地域を限定して SNS を活用し、地域コミュニティの活性化を目指す取組に関連して、3 つの集落・旧村範囲における Facebook グループと Facebook ページの比較分析を行った結果、地域内に限定した交流に SNS を使うのは課題が多いことが窺えた。現状では地域内に限定した活用に対してモチベーションを保ちにくく、地域別の課題にフィットした具体的な目的の設定が必要とされる。一方で、地域外への情報発信や情報交流については 2 地域で活発に継続しており、現状では、農山村地域では地域外を対象とした情報発信における SNS 活用が有効であることが窺えた。

1980年代南東アラスカ・先住民企業の木材生産と

持続可能な森林管理

名古屋市立大学・奥田郁夫

南東アラスカのひとびとの暮らしは、温帯雨林とその豊かな生態系の恵みに多くを負ってきている。今日では、漁業とともに観光業がこの地域の基幹的な産業となっている。また、森林の生態系に育まれたサケ類や果実類、およびシカなどに依存した自給自足の生活が、長い年月にわたってひとびとの生活を支えてきた。ただし、農業生産には適さない地勢であり、かつ、旧 48 州から遠隔地にあるため、製造業の立地も経営的に難しい現状がある。さらに、19 世紀の末頃からは各地に金鉱が発見され、これがアラスカにおける鉱物資源の潜在性を知らしめることとなって、現在に至っている。

本報告で検証する 1980 年代は、アラスカ州の歴史の画期となる時期である。アラスカ史上初めて、先住民のひとびとは土地を所有することになり、その土地（森林）において、自分たちが組織した株式会社による企業活動を行うという経験をもつことになった。

「1971 年アラスカ先住民の請求にもとづく継承的不動産設定法 (Alaska Native Claims Settlement Act :ANCSA)」の成立過程については、すでに報告した。この法律にもとづいて設立されることになった株式会社 corporation には、地域会社 regional corporation とコミュニティ会社 village corporation とがあるが、本報告ではこれらを合わせて先住民企業 native corporation と呼ぶ。先住民のひとびとは、1971 年以前に有していたアラスカにおけるすべての権益と引き替えに、ANCSA にもとづいて森林などの土地の配分を受けることになった。しかしながら、実際にその土地の配分が始まるまでには、ANCSA 成立後なお 10 年ほどの期間を要した。これは、国立公園などに追加的に編入すべき土地などの確定が優先されたためであった（この経緯についても、すでに報告した）。

先住民企業のひとびとは、多くの場合に、このような経過を経てうることになった森林を開発することによって企業的な利益をあげようとした。それは、ANCSA が株式会社方式を通じて「先住民のひとびとの経済的自立」をめざしたことの結果でもあった。

しかしながら、持続可能な森林管理を展望したとき、木材生産の周期の長さ（たとえば、南東アラスカでは数 10 年から 100 年以上という）は、1980 年代以降の先住民企業の経営に大きな影響をおよぼした。

本報告では、以上の点について、南東アラスカの森林面積規模の大きな地域会社（シーラスカ）と小規模なコミュニティ会社（フーナ・トーテム）を事例として、1980 年代の経験を比較検討し、南東アラスカにおいて持続可能な森林管理を実現できる森林面積の規模について考察する。

香港における栃木産米の購買選択行動と市場可能性

共栄大学国際経営学部

中村 哲也

千葉大学大学院園芸学研究科

丸山 敦史

東日本大震災以降、わが国の農林水産物及び食品輸出額は、5000億円の壁にぶつかっている。日本食の人气が高く、最も輸出額が大きい香港においても、高品質・高価格な農産物のみが輸出されている状況である。香港におけるコシヒカリの1kg当たりの小売価格を比較しても、中国産が200~260円、アメリカ産が490円であるのに対し、日本産は950円程度であり、主要国の同産品と比較しても2倍~6倍の格差がある。栃木県が香港市場への輸出するコメは、なすひかり、特別栽培米・無洗米こしひかりである。そこで香港人が価格差のある栃木産と外国産をどのように選択するのか、用途の違う栃木産米をどのように選択するのかを考察しながら、栃木産米の購買選択行動と、今後の市場可能性を探る。

調査対象者は香港FOODEXPO2013栃木県ブースの来訪者であり、調査は2013年8月15日(木)~17日(土)に実施された。調査票は完全回答236通を分析に用いた。調査サンプルは女性が74.2%、香港人が87.7%、一般客・主婦が30.1%、食品関連企業が16.5%、飲食店が14.0%、平均年齢が42.5歳、平均年収が28.3万HKDであった。次に、香港人が普段食するコメは、52.5%がインディカ米でもジャポニカ米でもどちらも食べていたが、32.2%がインディカ米を食べている。日本産米を購入する際、重要だと思われる項目は美味しさ(65.3%)、高品質(36.0%)、安全性(34.3%)等であった。

次に、日本産と他の海外産のコメが販売された場合、なすひかり(110HKD)と、アメリカ産(90HKD)、中国産(40HKD)の価格をみて、どれを購入するのか尋ねたところ、中国産とアメリカ産を比較した場合は中国産(17.4%)を、中国産となすひかりではなすひかり(29.2%)を、アメリカ産となすひかりでもなすひかり(49.2%)を購入した。更に、栃木産の中でも、なすひかりと特別栽培米こしひかり(135HKD)、無洗米こしひかり(150HKD)が販売された場合については、なすひかりと特別栽培米ではなすひかり(25.0%)を、なすひかりと無洗米ではなすひかり(32.6%)を、特別栽培米と無洗米では特別栽培米(28.8%)を購入した。日本産と外国産を比較すれば、価格が高くとも日本産を購入するが、日本産同士の比較であれば、価格の安いなすひかりを購入した。

輸入米を購入する香港人像をプロビット分析で推計し、考察した結果、中国産より米国産を選択する者は、品質を求めないが、高級感を求める飲食店が選択し、中国産よりなすひかりを選択する者は、信頼性を求める飲食店、アメリカ産よりなすひかりを選択する者は、年齢が高い男性であった。また、なすひかりより特別栽培米を選択する者は、ジャポニカ米を食べる香港人であった。そして、特別栽培米より無洗米を選択する者は、低価格性を求めない食品関連企業や一般企業であり、高級感や高品質性を求めた。

総合的に考察した結果、香港ではジャポニカ米の需要も多く、栃木産の強みは、美味しさや安全性、信頼性であり、なすひかりは中国産やアメリカ産より高くても購入される傾向にあった。しかしながら、弱みは高価格であることも現実であり、一般的な飲食店はアメリカ産を使い、特別栽培米・無洗米等の高級品は高級日本食店の需要に限られた。

食肉公社における輸出事業の現状と課題に関する一考察

—山形県および滋賀県の事例を中心に—

弘前大学・石塚 哉史

弘前大学大学院・高橋 周世

弘前大学・松崎 正敏

2013年5月に政府は「農林水産物・食品の国別・品目別輸出戦略」を具体的に展開するために新興市場を中心とした重点国・地域、重点品目を設定し、更なる推進を図った。このことを契機に「グローバルな食市場の開拓のための『FBI戦略』」が決定されることとなった。その後、2013年度の輸出実績は、5,505億元と東日本大震災・福島原子力発電所事故（以下では、「震災・原発事故」と省略）以前の水準への回復のみならず、関連統計を取り纏めて以降の最高値を示したところである。

前述の輸出実績の回復ないし、増加を追い風として、政府は更なる梃子入れを図っている。とりわけ、2014年6月の産業競争力会議「日本再興戦略の改定案」において、経済成長に伴う人口増加・市場拡大が見込まれる新興国での販売拡大を目指すために、海外の市場に合わせた輸出環境、海外市場向けの商品開発等の体制整備（グローバル・フード・バリューチェーン戦略、Japanブランドの推進、輸出モデル地区の創出、HACCP・ハラール、グローバルGAPの認証）を推進し、2020年に1兆円を達成した先の目標として、2030年に輸出額5兆円を実現する目標を掲げている。

このようにわが国において農産物・食品輸出の期待が高まり、積極的に推進している中で既存研究をみると分析対象に以下の特徴が見受けられる。第1に品目では果実・野菜という青果物に傾倒している点、第2に輸出事業の主体が地方自治体の関連する協議会および農協の分析が中心である点、第3に震災・原発事故後に農産物・食品輸出が停滞傾向を示していたが、その後いかなる対応を図り、輸出実績の回復させたのかについては不明瞭な部分が存在している点、の3点である。

そこで本報告の目的は、食肉公社における輸出事業の今日的展開に焦点をあて、食肉輸出の現状と課題について明らかにすることにおかれる。具体的には、株式会社山形県食肉公社（山形県山形市）および財団法人滋賀食肉公社（滋賀県近江八幡市）において実施した訪問面接調査に基づいて、①食肉輸出事業の目的およびその取組内容（輸出部位、販売先、販売促進）、②震災・原発事故前後における輸出事業の変化、の2点を中心に検討していく。

なお、本報告において山形県および滋賀県を分析対象とした理由は、農林水産省『農林水産物等の輸出取組事例』公表開始時から継続して掲載される数少ない畜産物輸出事業者である点、銘柄等付加価値を有する食肉の取扱いに積極的な姿勢を示している点、の2点があげられる。

Globalization of Malaysian Food and Japanese Acceptance

-A Case Study of Japanese Acceptance in Tokyo and Ipoh City, Malaysia-

Graduate School of Shinshu University Nabila binti Mohd Saidi
Shinshu University Sasaki Takashi

Development and globalization of Asian cuisines is emphasized in the previous discussion. Malaysian government initiated the Malaysian Kitchen Program to promote Malaysian food in the world and a Malaysian restaurant was opened in Tokyo in 2008 under this program.

Malaysia's society is made up of three main ethnicities: Malay, Chinese and Indians. Many other ethnicities live mainly in rural areas of the country. Malaysian cuisine is a melting pot of many different culinary heritages, thanks to its ethnical variety. Though it has the potential to diffuse in foreign countries, Malaysian cuisine is relatively lack of global spread compared to Thai, Vietnamese and Indonesian cuisine.

Yoshino showed three points of view on the globalization of Malaysian cuisine: tourism, social bearers of culinary globalization and role of the state. M. Shahrim suggested that Malaysian food is unclear on the images of food and dining atmosphere and features and they should be improved.

Recently, Japanese visitors to Malaysia have increased but the situation does not change much. To figure out the problem, case studies in Tokyo and Ipoh were conducted. The objective of the study is to find out the way of acceptance and what kind of impression do they have, and does the first impression of Malaysian food change over the time.

Investigation was conducted in Tokyo and Malaysia by using questionnaire sheet and interviewing Malaysian restaurant owner. Data was collected from 44 Japanese customers in Tokyo and 78 Japanese people in Ipoh city, Perak state. Ipoh city was chosen as the study area because its nature, fresh air, uncrowded and quiet atmosphere with low cost of living is attracting Japanese people to stay longer in Malaysia.

The result showed that 27 out of 44 people were first timers and 17 people were repeaters in Malaysian restaurant in Tokyo. In Ipoh, many respondents had general Asian Food image towards Malaysian food before coming to Malaysia. After staying in Ipoh, 41.0% of the respondents think Malaysian Food whets the appetite. In the favorite meal question, Malay cooking scored the highest. The respondents still enjoy Malaysian Food even after a long time. However, the respondents staying before year 2006 do not eat Malay cooking much but the respondents staying from year 2011 eat Malay cooking more. The reason why they do not eat much is that Malay cooking is high calorie, too spicy, oily, has strong flavor and smell. On the other hand, the short-stayed Japanese commented that they still enjoy spicy and oily Malay cooking as well as the strong flavor and smell. The finding is, the Japanese who stayed within two years enjoy Malaysian Food but after that, they eat less Malay cooking and prefer a healthier, less spicy cooking, with a lighter flavor and smell.

For the spread of Malaysian food in Japan, it is important to maintain the first impression of Malaysian food.

食用油脂企業の中国国内販売戦略

－江蘇省 F C 社の事例－

桃山学院大学大学院 金子 あき子

桃山学院大学 大島 一二

日系食品加工企業は、1990年代に、改革開放政策に基づく外資企業への優遇政策を推進する中国への進出が増加した。当時の日系食品加工企業の中国進出の主要な目的は、安価で豊富な労働力を活用し、低コスト製品を生産し、日本および欧米地域への輸出を拡大することであったが、2000年代に入り、中国における外資系企業への優遇税制政策の廃止・縮小、人件費高騰等のコスト増大、人民元高などの影響により、輸出拠点としての中国進出のメリットはほぼ失われたと考えられる。それにたいして、中国国民の所得増大による消費力の向上が顕著となったことから、多くの日系食品加工企業は、日本・欧米への輸出から中国国内向けの販売に経営をシフトさせ、中国国内販売を活発化させている。しかしながら、中国国内における市場競争の激化、代金回収問題、食品安全問題の顕在化等の諸課題により多くの企業は苦戦を強いられている。

本報告は、こうした動向に鑑み、日系食品企業がどのような中国国内販売戦略をとっているのかを知るために、中国江蘇省に進出した日系企業 F C 社を研究事例として取り上げる。F C 社は、パーム油等の植物性油脂を中国国内外から調達し、最新の加工設備、高水準の加工技術を用いて、高品質・多機能な油脂製品および製菓・製パン素材を製造・販売している企業である。

F C 社は、大阪府南部に展開する F 社を核とする合弁企業として設立された。F C 社の沿革としては、1995年に中国国内販売を目的に進出したが、その設立当初は、中国国内において高品質な油脂の需要が高かったため、流通菓子を生産する日系・外資系企業等を中心に高品質油脂を販売した。しかしながら、中国系・外資系植物油脂企業間における競争が激化していることなどの理由に加え、現在、中国国民の食の洋風化の進展を背景に、急速に製菓・製パン店舗が増加していることから、植物油脂販売から、さらに高度な加工を必要とするマーガリン、カスタード、チョコレート等を中心とする製菓・製パン素材の生産・販売を加速させている。

報告では、以下の点に注目する。

- ①中国国内の油脂業界および製菓・製パン業界の特徴について整理する。
- ②F C 社の中国進出から現在の事業展開に至るまでの経緯に着目する。
- ③F C 社の中国国内で展開する独自の販売戦略を明らかにする。
- ④F C 社の事例をもとに、日系食品企業の中国国内販売の進め方について検討する。

産地サイドからみた中食企業におけるバイヤー機能の分化 - 集中調理施設の有無とチェーン規模に着目して -

秋田県農業試験場・齋藤文信
新潟大学・清野誠喜

1. 課題と方法

現在、フードサービス業各社は差別化戦略を積極的に進めている。農業とフードサービス業の関係から見れば、メニューに関連した差別化、特に食材の差別化戦略との関係が強く、生産者がフードサービス業の差別化戦略に積極的に対応する事例がみられるようになった。

事例の増加に伴い、研究の蓄積も進んでいる。齋藤（2008）は生産者側でのメニュー提案まで踏み込んだ営業の必要性を論ずるなど、生産者の対応課題を明らかにしている。さらに齋藤・清野（2014）では、生産者との交渉・商談相手となるバイヤーの持つ機能、特に食材の探索機能に着目して、ファストフードと中食という業態の違いとチェーン展開方法の違いから考察し、バイヤー機能の分化の現状を明らかにした。具体的には、産地から見てファストフード業態には既存品目の提案が有効であることを指摘し、中食が産地として幅広い品目を提案しやすい企業であることを明らかにしている。しかし中食業態にもチェーン規模や調理場所（集中調理と店舗調理）が異なる企業があり、中食企業におけるバイヤーの機能がメニュー開発とどのような関係にあるのかは十分に明らかになっていない。

そこで本報告では、チェーン展開を図る中食企業を対象に、集中調理施設（CK）の有無とチェーン規模に着目し、食材調達を担うバイヤー機能と、メニュー開発の関係についてその現状と産地との関わりを明らかにすることを目的とする。方法は既存研究の整理・分析と、中食企業3社を対象としたヒアリング調査による事例分析である。

2. 結果

事例分析の対象とした3社（A社、B社、C社）は、各社とも青果物を差別化食材として位置づけ、A、B社がナショナルチェーンで、C社はローカルチェーンである。まず各社のバイヤー機能を整理しメニュー開発パターンについて比較すると、CKを持つA、C社は本社においてメニュー開発機能を持つ担当者が開発するのに対し、CKを持たないB社では本社のメニュー開発担当者だけでなく、店舗担当者と地域責任者レベルでもメニュー開発が行われている。このメニュー開発パターンの差から、食材探索機能が本社内に留まるA、C社と店舗まで及ぶB社で違いが確認された。次にチェーン規模からみると、ナショナルチェーンのA、B両社では基本的に調達数量は多くなる。しかしB社の店舗開発メニューは小ロットで調達する品目となり、また「今ある食材」を迅速にメニュー化するなど、B社はチェーン店であるが生業店のように機能が一体化している部分もあった。一方、ローカルチェーンであるC社の調達数量はA、B社より少ないが、CKによる一括調理のためロットが必要で産地側に一定の供給能力が求められる。また「今ある食材」を短期間でメニュー化するのはCKの性質上難しく、食材探索とメニュー開発にタイムラグが生じる。

これらのことから、産地からみて取引提案が容易に行う事ができるのは、チェーン規模の大小よりも、店舗においてもメニュー開発を行う企業であることが示唆された。

京都府中丹地域の消費者動向における地域差

龍谷大学・京都府立農業大学校 河村能夫

本報告は、京都府中丹地域(福知山市、舞鶴市、綾部市)における消費者動向調査に基づいて消費者動向における立地条件の影響を計測したものです。これら3市では、人口の減少や高齢化に伴う過疎、いわゆる「限界集落」の増加、耕作放棄地や鳥獣害被害の拡大、産業の衰退、雇用の減少、生活環境(交通・医療・福祉・教育)の悪化など、共通の課題を抱えています。その一方で、若い世代が中心の住宅地が形成されたり、交通網の発達に伴って各市、または中丹地域を飛び越えるような生活圏の形成がみられたりするなど、各市独自の事情による新たな様相も見えてきています。

このような背景から中丹広域消費者動向調査は、平成23年度から実施に向けて検討を重ねてきました。発端は、舞鶴市の呼びかけに応じて、一般財団法人地域公共人材開発機構(以下、地域公共人材開発機構)が事務局としてコーディネートを行い、福知山市商工会、福知山商工会議所、舞鶴商工会議所、綾部商工会議所、福知山市、舞鶴市、綾部市、アドバイザーとして河村能夫(龍谷大学 地域連携フェロー)と岡田知弘(京都大学公共政策大学院教授)、オブザーバーとして京都府中丹広域振興局が参加し、「中丹地域の広域商業圏における消費動向調査に関する懇談会」が組織されたことに始まります。平成24年2月からは「中丹広域商業圏政策協議会」へと体制を変え、また第4回協議会開催からは、事務局を一般社団法人京都府北部地域・大学連携機構へと変えながら、課題の検討、調査対象の設定、アンケート調査の作成などが行われてきました。平成24年12月にアンケート調査を行い、その後、調査で得られたデータについての解析を行ってきました。このたびの報告は、この解析結果の内、DID地区・DID隣接地区、DID中間地区、DID遠隔地区によって消費者動向がどう変化するかに関心を合わせたものです。

調査概要は、人口総数と高齢人口率、それに加え人口集中地域(以下、DID)までの所要時間の3つを変数として、サンプリングの母集団を作り、地理的条件、世帯数、さらに各市担当者と相談を重ね、調査対象地域である中丹地域全体から23地区(福知山市10地域、舞鶴市7地域、綾部市6地域)を抽出し調査対象地区としました。

今回の「中丹広域消費者動向調査」では、大きく分けて以下のような質問をしました。

- ① 世帯の状況、
- ② 4つの品目(食料品、日常衣料品、日常以外の衣料品、家具・家電)についてそれぞれの、購入者、購入先、交通手段、購入先の選択理由など

これらの質問項目の内、立地条件の差により消費者行動に差があるものを考察対象としています。